始

北村勳 著

日曜學校教話資料

大正
14. 11. 7
内交

日曜世界社版

285-27

はしがき

兒童のために宗教的な話をする日曜學校の教師、校長、牧師、あるひは兒童の父兄、諸學校の教師のためにお話の材料を提供すると同時に、少年少女諸君に利益になる本として讀んで頂きたいと思つてこの小集を發行することにしました。

いま、日曜學校は宗教々育と云ふ目標を掲げて進まうとしてゐます。そしてただに面白い話をするだけでなく、宗教經驗を得させる所として用ひると云ふ所まで到達してゐます。けれど適當な話材が無いためともすれば興味本位になりがちであります。かかる缺陷を本書が補ひますなら、著者の本望であります

日曜學校の校長が授業のあとで短いすすめをされるために都合のよい短い話も澤山取り入れました。

說教集でありまして、學課ではありませんから系統は立つてゐません。神學

の講義でもありません。宗教經驗と云ふ所にどこまでも重きを置きました。

説教のあるものは私が主宰する雜誌「日曜學校の友」に掲げたものや、高輪日曜學校で説教したものであります。

この書の裝幀やカットは畏友山本保氏が物してくれたので誌して謝意を表します。

この書を私をして日曜學校の研究に導いて下さつた故赤星仙太氏に献げます

一九二五年六月

東京角筈にて

著者

目次

（一）信頼せよ……（一）
（二）祈りを聞く神、聞かぬ神……（六）
（三）良い友達……（一一）
（四）神の言葉……（一六）
（五）美しい顔、美しい心……（二三）
（六）美しい顔……（二七）
（七）一番強い者……（三三）
（八）善き指導者……（三九）
（九）ビールを家具に……（四一）
（十）他人の幸福……（四三）

（十一）信仰……（四八）
（十二）英國皇太子……（四九）
（十三）出口……（五二）
（十四）土地を善くする方法……（五六）
（十五）恐れに勝つ道……（五九）
（十六）饑ゑし子供のために……（六三）
（十七）善き黑人……（六五）
（十八）隣人の話……（六七）
（十九）ランフォール卿の幻……（七〇）
（二十）正しい報ひ……（七四）
（二十一）イエスさまの足跡……（七六）
（二十二）善き實……（七八）

（二十三）良き實を結ぶ秘訣……（八一）
（二十四）キリストを着る……（八三）
（二十五）イエスに從ふ……（八六）
（二十六）カルヴァリ、クローバー……（八八）
（二十七）神の磁石……（九〇）
（二十八）神の感化——聖靈……（九三）
（二十九）親元……（九六）
（三十）楓の實……（九九）
（三十一）退却しない人……（一〇一）
（三十二）どちらが有難いか……（一〇三）
（三十三）キリストを信ずる者の名稱……（一〇五）
（三十四）金銀は我になし……（一〇八）

(三十五) 他人のための祈……(一一三)
(三十六) 忍耐深き祈……(一一八)
(三十七) 祈の經驗……(一二一)
(三十八) 神を思ひ出すには……(一二四)
(三十九) 苦しみにあつた人の信仰……(一二七)
(四十) あはれみある者……(一三〇)
(四十一) 二里の道……(一三九)
(四十二) 主の葡萄園……(一四九)
(四十三) 不思議な燈火……(一五五)
(四十四) 隣人……(一六八)
(四十五) 獄中の讃美歌……(一七九)
(四十六) 誰にもできる傳道……(一八三)

(四十七) 善と惡……(節制日のため)……(一八七)
(四十八) イースターの贈物……(イースターのため)……(一九一)
(四十九) 地蜂の門番……(母の日のため)……(二〇〇)
(五十) 神の愛する子供……(子供の日のため)……(二〇七)
(五十一) 茨と百合花……(花の日のため)……(二一七)
(五十二) 勇敢な青年……(クリスマスのため)……(二二七)
(五十三) 神の武具……(節制日のため)……(二三二)

〔目次終り〕

信賴せよ

（一）

私たちは親から『これをしておくれ』といひつけられた時、『何故それをするのですか』とか『それが何んの役に立つのですか』と、よく聞き返へすことがあります。

神様が『これをせよ』と仰せられた時や、聖書に命じられた事を、私共はよく『何故しなければならぬか』とか『それが今役に立つか』とか言ひ易いものであります。

けれども神様はすべてを御存じであります。神様の命令にはすこしの間ちがひもありません。私たちは『はいすぐに致します』と神様や兩親や、先生やお

友達に答へたいものだと思ひます。いひつけをよく聞いて立身した人のお話を一ついたしませう。

（二）

むかしある王様が信頼のできる一人の下僕を雇ひ入れやうと思つて、國中にお布令を出しました。國中の人々は我こそ、王様の下僕になつて立身をしやうと思つて、王様の所へおしかけて參りました。

大勢の志願者の中から、王様は二人の下僕をやとつて使つて見る事にしました。王様は、はじめの日二人の下僕にお庭の井戸から水を汲ませました。

井戸の水を汲んでは籠の中に入れると云ふ不思議な命令を王様は二人に下しました。はじめの間は、これが立身の緒だと思つて、水をガラン〳〵と汲んでは、ジャーと籠にうつしました。けれども、籠に汲むのですから水は洩れて

しまつていつまでたつても、籠の中に水はたまりませんでした。

それで一人の方はどう〳〵あき〳〵してしまひました。そしてブツ〳〵と不平を言ふのでした。

『私は王様の下僕になつて、もつといい仕事をするのだらうと思ふと、水汲みを命ぜられてしまつた。それも出世の緒だと思つてやりかけたのだが、何んて馬鹿らしいことだらう。籠の中に汲むんぢや、三年たつたつて、一ぱいになりつこはない。王様も餘程薄馬鹿だ。私はこんな間抜けた事はして居られぬ』

かう言つてその男はどう〳〵王様に暇を貰つて出て行つてしまひました。

けれども、もう一人の人はちがつた考へを持つてゐました。

『私はただ王様に命令られた通りをしさへすればいいのだ。何か王様には、籠に水を汲むについてお考へがあるのだらうから』

かう考へて一人になつても、一生懸命にガランガランと汲んでは、ジャーと

籠に流しました。そのうちにだん〳〵と井戸の水はすくなくなりました。下僕はどの位すくなくなつたかと思つて、井戸をのぞいて見ますと、何かくらい井戸の底でチカ〳〵と輝いてゐます。

なんだらうと思つてなほも汲み出してゐると、やがて、チリン、チリンと汲んだ水の中から、籠の中へ落ちたものがありました。下僕は驚いてよく見ますと、それはダイヤモンドをちりばめた指環でありました。

下僕は、はじめて籠に水を汲んだわけがわかりました。

『フム、わかつた。この指環が井戸に落ちたから王様が水を汲めと仰有つたのだ。水が無くならないうちに、指環が汲み上げられたら籠に受留めるやうに、籠に汲めと言はれたのだつた』と、その人は獨言を言ひながら、すぐに王様に指環をとどけました。

王様は大そう喜んで

『指環は褒美としてお前に上げる。お前は私の言つたことに信頼して仕事をしてくれた。私はそれで今度からは、もつと大きな事にもお前に信頼することができるのだ』

と申され、それから後はその下僕を重く用ひました。下僕はとう〳〵王様の立派な臣下になりました。

祈りを聞く神、聞かぬ神

昔話を一ついたしませう。

ある片田舎の野原にすこし間をおいて二つの石地藏がありました。

ところがその一つの地藏には何んでも願ひさへすれば聞いてくれると云ふ話が傳へられました。それを聞いた村の人たちは我も我もとその地藏の所へお參りしては、いろ〳〵のことをお祈りしたり、願つたりしました。

『私の家の子供が今度中學校に一番で入學します樣に』と祈る親がありました。するとすぐにその子供は中學校に入學が出來ました。私の家の病人がよくなりますやうに』とか『どうぞ今年は豐年でお米が澤山取れますやうに』とか『どうか私の家の商賣が繁昌しますやうに』とか、人々はいろんなことをこのお地藏さんに願ひました。

すると不思議にも、みんなその祈りはきかれまして、とう〳〵その村の人たちは、みんなお金持ちで健康で、病人だの、泣いたり悲しんだりする人は一人もなくなりました。

その話が擴つたものですから何十里と云ふ所からわざ〳〵この地藏にお參りに來る人たちが引きもきらずありました。それで原中にあつたこの地藏の所には大きな道ができ、道の兩側には茶店だのお土產を賣る家や宿屋などが一ぱい建てられて賑やかになりました。

けれども一方の地藏はお祈りを聞かぬ地藏だと云ふので、たれ一人としてお參りするものがなく、道には一ぱい草がはえ、時々小鳥が來て鳴くか、こほろぎが秋になればそこで鳴く位で、淋しいものでありました。

けれどそのうちにこの村に大へんなことが起つて參りました。最初のうちは人々は祈りを聞く地藏に自分が幸福になることだけを祈つて居りましたが、人

間と云ふ者は愚かなもので、誰よりも、もつと豪い人や金持ちになりたがりまするもので、そのためには人を倒してもかまはぬと云ふやうな人が出て參りました。

それで『私の家を××さんよりも、もつと金持ちにして下さい』と祈るものが出て參りました。すると××よりも、もつとお金持ちになりました。それを見た××は承知しないで『私を△△さんよりも、もつとお金持ちにして下さい』と××は祈りました。かうして兩方が祈つてゐるうちにとう〳〵『××さんを貧乏にして下さい』『いや△△さんを貧乏にして下さい』それがさらに惡くなつて『××さんを病氣にして下さい』『△△さんを殺して下さい』と大へんなことを祈り出しました。

そんな祈りをみんな聞かれたものですから、大へんなことが起つたのも無理はありませんでせう。村中やその近所には喧嘩が絶ゑ間なく起り、貧乏になる

者、病氣になる者、死ぬるものが引續いて起つて、さしも幸福で笑ひ聲や歌聲にみちて平和であつた村中が急に火の消えたやうな、悲しい淋みしい村にかはつてしまひました。

そのうちに人々は考へ出して、お祈りを聞かぬ地藏の方へ參る人がだん〳〵と多くなつて來ました。その反對にお祈りを聞く地藏の方にはだん〳〵と參る人がすくなくなりました。

それから長いことたつうちに、前とは丁度反對になつて、お祈りを聞かぬ地藏への道は立派になりましたが、聞く方の地藏には誰れも參る人はなく、その道にあつた店や家はなくなり、その道には草が一ぱい生えて、蟲が冷しい聲で鳴くやうになりました。

この昔話の意味はよくおわかりになつたことと思ひます。そんな石で作つた地藏でお祈りを何んでも聞くやうな力があると云ふことはあり得ないことで

あります。それでこの昔話はたとへ話であります。

けれども天の父なる神は私共のお祈りをほんたうにおきき下さいます。おきにはなりますが、昔話の地藏のやうにどんな祈りでもきかれるのでなく、正しいよい祈りだけをおききになります。惡い正しくない祈りは決してきかれません。

私共がまちがひのない、人のためになるお祈りをすればきつと聞いて頂けます。

良い友達

（一）

私たちの誰れでもが持つてゐる者—ある人はたくさんに持つてゐませう。ある人はすこししか持つてゐませんでせう。毎日かへる人もありませうが、いつまでも持つてゐる者もあります。それは友達です。

良い友達を撰べとはよく敎へられますが、自分がよい友達にならうと心がけることは、もつと大切なことであります。

私たちは聖書で、ヨナタンとダビデの、美しい友達であることを學びます。二人ともよい友達であり、よい友達にならうと心がけてをりました。

（二）

羊飼の少年ダビデが强敵ゴリアテを斃した後にヨナタンとダビデは友達になりました。ヨナタンは良い友達を撰びました。

ダビデはゴリアテを斃したので、一時に有名になりました。それからのち、ダビデは度々功名を立てて、益々有名になつて來ました。けれどもヨナタンはダビデが有名になるのをすこしも羨みもしなければ、妬みもしませんでした。ヨナタンはダビデが有名になるのをまるで自分が有名になるかの樣に喜びました。ヨナタンの愛は嫉妬を起すには、あまりに大きく、あまりに寛大でありました。

そのうちにダビデが神樣から王樣になる人に撰ばれたのだと言ふ噂がきこゐて來ました。王樣の子として、あたりまへなら、王樣になる筈のヨナタンはそれを聞いて何んと思つたでせうか。

ダビデの益になることは、ヨナタンにとつては損になります。ヨナタンの父親のサウル王樣はダビデが王になると言ふ話を聞いて烈火のやうに憤りました。

けれどもヨナタンはすこしも憤りませんでした。自分の親友ダビデが王樣になるのだと思つて心から喜んでやりました。そしてサウルがダビデを殺さうとすることがわかつたとき、ひそかにダビデを逃がしてやりました。

(三)

私たちにこんな友情が持てませうか。友達と賞品を得るためとか、いい成績を得るためとかで競爭をします。その結果自分がまけて友達が勝つたとしますその時その友達のために、心から喜んでやることができませうか。むつかしいことでありますが、やればきつとできると思ひます。

友達のために喜ぶためには、友達のために自分を後にかくさなくてはなりません。

英國に有名なターナーと云ふ畫家がありました。このターナーに美しい話が

あります。ある時ロンドンに有名な展覽會がありました時、集つた良い繪をみんな壁にかけてしまつた所に、一つの無名の作家の大へんいい繪が參りました。審査員たちは誰もその繪が立派なものだとは思ひましたが、もうこの繪を掲げる場所が無いと言つて落選させやうとしました。その時ターナーが靜に

「僕がその繪をかけやう」

と言つて、人々が呆氣に取られてゐる中に、靜に自分の繪をはづして、無名作家の繪をかけてやりました。

（四）

私たちも、ヨナタンのやうな、ターナーのやうな、友達のために美しい、寛大な、自分のことを忘れるやうな心が持てる樣に神樣に祈りたいと思ひます。

チャールス、キングスレーは「自分の生活が美しいのは友があるからだ」と

申しましたが、私共の生活を美しくするためには、良い友達が一番大切であります。

私たちは世界中でたつた一人の良い友達を持つてゐます。それはイエス樣です。イエス樣は私たちが善い時ばかりでなく、惡い時でも愛して下さいます。悲しい時にはなぐさめ、嬉しい時には共に喜んで下さいます。私たちは友達にイエス樣を選び、その友達を愛さなければなりません。

神の言葉

しもべきくエホバ語り給へ（サムエル前書三の九）

（一）

小さい少年サムエルにある晩、神様が「サムエル、サムエル」とたび〳〵聲をおかけになりました。けれどもサムエルは神様がおよびになるとは、はじめには知りませんでした。けれどもエリ先生から、それは神様がおよびになるのだから、今度きこゑたら「しもべきく、エホバ語り給へ」と答へよと敎へられました。

静な夜サムエルが神殿に休んでゐますと、また「サムエル、サムエル」と言ふ聲が聞ゑました。それでサムエルはエリ先生から敎へられた通り「しもべきく、エホバ語り給へ」と答へたので、神様はサムエルにいろ〳〵なことをお語りになりました。

神様がお語りになるのは、サムエルだけにではありません。私たちにも色々な方法で常にお語りになります。それですから私たちはいつでも「しもべきく、エホバ語りたまへ」と答へ得る覺悟が大切であります。

（二）

ある少年が日曜學校でお祈りのことをききました。「お祈りをしないとイエス様を辱しめ、イエス様を拒むのだ」と言ふ言葉を深く覺ゑて家に歸りました。

少年の兩親や兄弟姉妹たちは信者でありませんから、むろんお祈りもしませんし、神様があると云ふことさへも知りませんでした。けれども少年はそんな人たちの中にまぢつて毎日お祈りをしました。うちの人たちは側で笑つたり、冷やかしたりしましたが、少年はかたく決必してゐましたから、お祈りをやめ

ませんでした。

けれども少年はある日遠くの市場に行かなければなりませんでした。市場は遠いのでその晩は市場の宿屋に宿りました。

宿屋には大勢の人が宿つて少年と同室の人は知らない大人ばかりで、お酒を飲んで騒いでゐました。少年はこんな人たちの中で祈るのがきまりが惡かつたので、一晩位おいのりをしないでねたつていいだらうと思つてねかけました。

けれどもその時少年の頭に「お祈りをしないとイエス様を辱しめ拒むのだ」と云ふ聲がどこからとなしに聞こゑて來ました。少年は驚いて大勢の人の中で、おくせずに一生懸命に祈りました。少年の心は人の騒ぎ聲にもさまたげられず、亂れず、神のみもとにまでとどく熱心な祈りでありました。

この時少年の耳に語つたのは誰でありませうか。それは日曜學校で敎へられた言葉であるには違ひありませんが、神樣がこの少年にお語りになつたのであ

ります。神樣は時には私共の記憶を通してお語りになります。

少年はその時以來ほんたうに神樣に祈る心がわかつて、それから後は祈りを缺かさない、立派な人になりました。

（三）

ある學校で成績のいいものに賞品を與へる試驗があつた時のお話です。一人の少年は他の學課はみんなよく出來ましたが、算術だけへたでありました。それで少年は算術の時間の時、敎師の眼を盜んで、敎科書を見て答へを寫しました。その結果この少年はどの學課もよく出來て、一等賞を貰ひそうになりました。

けれども少年の心はそれで安心ができませんでした。しよつ中何かしら耳のそばで聲高く少年を攻めてゐました。

「お前は嘘言つきで、盗人だ、お前は教師をあざむき、他の人の受取る賞品を盗むやつだ」

こんな聲がきこゐるので少年はとう〳〵たゐかねて、教師を訪ねて自分が不正をしたことを白狀しました。その結果少年は賞品を受取ることはできませんでしたが、その代り心の安心を得ました。

さてこの少年に聲高く語つて、とう〳〵白狀させたのは誰でせうか。あなたたちはそれは彼の良心だと答へるものもありませう。そうです。けれどそこには良心よりも、もつと大きなものがあつたにちがひありません。それは神が少年の良心を通してお語りになつたのであります。少年は神の聲をきき、それに從つたのであります。

（四）

今一つ話しませう。ある少年は父親が聖書の箴言を讀んでゐるのを傍で聞いて居りました。その中で「わが子よ、汝の心を我に與へよ」と云ふのが少年の耳にとまりました。他の言葉は忘れましたが、それだけは耳にこびりついてどうしても離れませんでした。

とう〳〵夜お祈りする時少年は「わが父よ、私の心をあなたに差しあげます。私の一生涯の間私の心をお用ひ下さい」と神様に祈つてしまひました。

この言葉を誰れがこの少年に語つたのでせうか。それは聖書の言葉だと人々は言ふでせう。さうです、けれど聖書は神の言葉であります。神さまはその子供に聖書を通してお話しになつたのであります。その少年は神の言葉を聽いてそれに從ひました。私はその少年が一生涯その決心を忘れないことを祈ります。

いつでも神様の聲に耳を傾けてゐて、聞いたらすぐに從はうと待ちかまへてゐることは愉快ではありませんか。神様は私たちに聞く耳と、聞いたらすぐに

従ふ意志をお與へ下さいました。

神様が私たちにお話しになる場合はいろ〳〵あります。ある時は直接私たちの心にお語りになります。ある時は聖書を通して、ある時は牧師や日曜學校の先生を通してお話しになります。またある時は、病氣、悲しみ、警告などでお話しになります。

私たちがただ注意さへしてゐれば、しば〳〵きこゑます。どうぞ耳をふさいで、聞かないやうなことをしないで下さい。神様の聲がきこゑない様に、この世のことで騒がしい音を立てないやうに注意なさい。私たちは心の中から「しもべきく、ヱホバ語りたまへ」と言はうではありませんか。

美しい顔、美しい心

聖書の中には人々から尊敬された人で顔形の美しかつた人が澤山あります。女ではサラ、ラケル、男ではモーセやダビテなどその一例であります。

誰も顔の美しいのを輕蔑しません。それは愉快なものです。それを善く用ひれば、力になります。美しい子供は可愛いものであります。それは神様がお造りになつたものであります。神様は美しいものをお愛しになります。

神様は世界中に美しいものを澤山お置きになりましたから、きつと美しいものがお好きなにちがひありません。空の星、雲、虹などなんと美しいではありませんか。森、花、草におく露など地上にも美しいものがあります。神様は世界中に私たちにこんなに多くの美しいものをそなへて下さいました。私たちは更に神様が子供をみんな美しく、可愛らしく造つて下さつたのにお禮を申しあ

げなくてはなりません。

けれども心が惡るければ、顏の美しさも美しくなくなります。それにどんな場合でも顏の美しいことを誇るのはよくありません。顏の美はぢきに消ねてしまひます。死の影がその上に輝いて居ります。それにこれを誇ることは危險なことであります。顏の美しいのに禍されて、罪を犯したり、死を招いたりした人が澤山あります。

私たちは顏の美しいことよりも、もつと高尙な、もつと善いものを求めなくてはなりません。新約聖書には私が知つてゐる限りは、善い人の顏形が美しいと言ふことが一度も書いてありません。イエスは智惠も身の長もいや優れたとは書いてありますが、美しいとは書いてありません。マリヤの信仰やドルカスの善い行ひのことは書いてありますが、その顏のことはありません。

新約聖書には心の美しいことだけが書いてあります。コリント前書十三章を

見るとよくわかりますが、愛がすべてのものを美しくします。ある人たちは顏を美しくするために色々なものを買つて塗りますが、心の中に愛をもつと多く貯へる方がはるかにやくに立ちます。

心の美しさは顏の美しさの足りない所を補つてくれます。月なみな病身な顏の人でも、その心が幸福な親切な心でみちてゐるため、美しく見ゑる人があります。この美しさは誰でも持てます。神に求めるなら、誰でも心の美しさは得られます。心が美しくなれば、美しい人をもつと美しくします。

曇つた所でも美しい花があります。けれども、それをキラ〳〵と日の輝く所に持つて行つてごらんなさい。數層倍美しく見ゑます。美しい顏に美しい心を宿らせたら、丁度日の下に花を持つて行つた樣に美しく見ゑます。

美しい顏も惡い性質や信仰の無い心のためにみにくく見ゑます。ある美しい顏はその心の醜さのために忘れられてしまひます。心の美しさは年をとつても

失せるものではありません。たとひ死が肉體をほろぼしても、消ねません。美しい心の持ち主は死んでも墓の外に天使のやうに輝きます。その顔は天の父のみ國で太陽のやうに輝くでありませう。

(J. Edmond, the Childre's Church at Home)

美しい顔

(一)

美しい顔と言つても色々あります。形の申分の無い美しいのや、色の白い美しい顔もあります。

それと共に、形や色は人並み優れてゐると云ふわけではなく、普通のありふれた顔でありながら、何處かその顔の奥に引きつけられるやうな美しい、床しさの顔があります。

有名な詩人にホイツチャーと云ふ人があります。美しい詩を澤山書いてをりますが、誰れでもホイツチャーの顔を見ただけでは、あまり美しい顔だとは申しませんでせう。けれどホイツチャーをよく知り、その美しい詩を讀んだ者は

ホイッチャーの顔を見て、それは美しさを通り越した崇高い、立派な顔だと思ふにちがひありません。何故なら、その心の中の美しい輝いてゐるものが、顔の外にあらはれてゐるからであります。「ホイッチャーの顔は山で神と語つて下りて來たモーセを想はせるやうに輝いてゐた」とある人が評して申しました。

エマーソンが詩人ロングフエローの死んだ時、その棺のそばに立つて「私はロングフエローの顔は見忘れてしまつたが、彼は美しい心を持つてゐたから、美しい顔をしてゐたにちがひない」と申しました。美しい心はその顔を見れば、見る眼を持つてゐる人にはきつと見ゐます。

有名な畫家たちはイエスの姿の後に、後光のさした輪を描いてゐますが、畫家たちは決して出鱈目を描いたのではありません。イエスの美しい輝く心と生活が、その姿にもあらはれて、イエスのお顔はきつと美しく輝いてゐたと思ひます。

（二）

ある日、日本の基督教の女學校に一人の婦人が訪ねて來て宣教師に尋ねました。

「ここの女學校の校長さんは美しい娘だけを入學させなさるのでせうか」すると宣教師は目を圓くして驚いて

「いいゐ、決してそんなことはありません。貴女はなぜそんなことをお尋ねですか」とききますと

「でもこちらの學校の生徒さんは揃ひも揃つてみんなお美しいやうに思はれるのでございますが」と、その婦人は申しました。そこで宣教師は

「それはこの學校では生徒の心が美しく、やさしく、イエス樣のやうな愛にみちた心を持つやうに教育いたしますから、きつとそれが外にあらはれて、顔か

たちまで美しく見ゐるのでせう」と言つて、色々と教育方針を話してきかせました。するとその婦人は

「私はクリスチャンでもありませんし、またならうとも思つて居りません。私の娘も信者にさせやうとは思ひません。けれど私の娘をこの學校の生徒さんたちのやうに美しくさせたいと思ひます」と答へました。

この婦人はそんなわからぬことを言つて歸りましたが、考へた末とう〳〵その娘さんを、この女學校に入學させたと云ふことであります。

この話のやうに信者の顏はきつとちがひます。ロバート、スペーヤ博士は印度から歸つて來て

「私は眞黑な印度人の顏を見ても、基督教信者かどうかは一目で見わけることができる。何故なら黑い顏の上にも信者には心の輝きがあらはれて見ゐるから

と」申しました。

(三)

英國の工場に働いてゐる一少女が、一日の働きを終へて夕方自分の家へ歸る電車を待つ間、プラットホームをあちこちとぶらついてゐました。それを電車の中から、一人の地位の高い、金持ちの貴婦人が見つけて、顏をさし出しその少女に向つて

「あなたはどうして、そんなに愉快に幸福そうに見ゐますか」とたづねました。

そこで少女は

「私は身體も心も救主イエス樣にお委せして居りますから」と答へました。

これまで金や名譽に飽き、何んでもほしいものは求めるままに得られたこの貴婦人も心の幸福だけは金や地位では得られませんでした。今この女工をしてゐる一人の貧しい少女からイエスの信仰の話をきいて、非常に感動して、熱心

な信仰を持つ人になつたと云ふことであります。

（四）

外國の金言に「美しい考へが美しい心を作り、美しい心が美しい顔を造る」といふのがあります。また「顔は内から造作して、外から造作するな」と云ふ諺もあります。考へや心を美しくさへすれば、顔もきつと美しくなる。美しくならうとして、紅や白粉だけでかざつて、心を美しくすることを忘れてはならぬと云ふことを敎へた諺であります。

「輝く基督者たらんと思ふ者は祈りに時を送れ」とトウレイと云ふ人は敎へて居ります。祈ることが心や顔を美しくする方法であります。

一番強い者

（一）

世界中で一番強い者は誰れでせうか、私たちはたれでも一番強い者の下に從ひたいと思ひます。

クリストハーと云ふ人がむかし、誰れでもいいから世界中で一番強い人の臣下になりたいと言つて探してあるきました。その中にある強い王樣を見つけてこの王樣が世界中で一番強いのだと思つて臣下になりました。王樣は力が強くてその臣下たちには強い勇士が澤山あり、武器も揃つてゐるので、度々戰爭をしても、一度だつてまけたことのないと云ふ王樣でありました。それでクリストハーは自分は一番強い者の臣下になることが出來たと言つて喜んで居りました。

けれども、ある時王様が自分の力の強いことを自慢して「俺は惡魔より他のものは誰れも恐れぬ」と申しました。クリストハーはそれをきいて「何、王様が恐れる惡魔があるのか、よし、そんなら俺は惡魔の臣下になる」と言つてフト出てしまひました。

それから、クリストハーは惡魔の臣下になつて、こんどこそは一番強い者の臣下になつたと思つて滿足してをりました。

けれども、ある日クリストハーが惡魔のお伴をして歩いてゐると、向ふの丘の上にみすぼらしい木の十字架が立つてゐるのに出會ひました。惡魔はそれを見るといやな顔をして、そこをさけて廻り道をして行きました。

あまり樣子が變なのでクリストハーが惡魔に「なぜ廻り道をするのですか」と尋ねますと、惡魔が「俺はあの十字架が怖ろしいのだ、俺はあれにまけたのだ」と答へました。

そこでクリストハーが「あの十字架にたれがかかつたから怖ろしいのですか」ときくと、惡魔は「いや、わしはその人の名前を言ふだけでも怖ろしいので」と言つて、急いで行きました。

あとに殘つたクリストハーは考へてゐましたが「そんなら私はその十字架にかかつた人の臣下になる」と言つて探してあるきました。

そしてとう〳〵イエス樣を見つけて、イエス樣に從ひました。

（二）

朝鮮の古い童話にこんなお話があります。

土の中である日、土龍が世界中で一番強い者はたれであるかと言ふ會議を開きました。一匹が立つて「それは空に輝いてゐる太陽です。太陽以上に強いものはどこを探したつてありはしない」と申しました。多くの土龍たちは感心し

て、「なる程そうか」と思つてゐました。

すると一匹が立つて申しますには「いや、太陽よりも、もつと強いものがあります。それは雲です。いくら太陽が照つても、雲が出ると太陽の光が見えなくなります、それですから雲の方が強いと思ひます」と申しました。一同は手を拍つて、「そうだ〳〵」と賛成しました。

すると又一匹のもぐらが出て申しますには「いや、私は雲よりも、風が強いと思ひます。何故ならいくら雲が太陽をさへぎつてゐても、風が吹くと雲は遠くへ追ひやられますから」と申しました。一同はまたそれにも賛成しました。

それでは風が一番強いにきまつたかと思つてゐると、また一匹が申しますには「私は風よりも、ここの地面に座つてゐる大きな石地藏がもつと強いと思ひます。何故ならいくら風が吹いても、この石地藏だけは倒すことができませんから、石地藏の方がもつと強いと思ひます」と申しました。

すると一匹の小さい土龍が「いいね、それはちがひます、石地藏よりも、私たち土龍の方が強いと思ひます。いくら地藏樣が座つてゐても、私たち土龍が、土を堀ればいつかは倒れます、それで私は土龍の方が強いと思ひます」と申しますと、今度は土龍たちが一同で大喜びで手を拍いて賛成しました。

(三)

このお話しで土龍は、自分たちが一番強いと思つて滿足した樣に思はれますが、私たちから見たなら、土龍よりも、もつと強いものが世界中に澤山あることがわかります。

けれども世界中で強いものがいくらあつても、それにかつものがいくらでもあります。

私たちはたつた一人の一番強いものを知つて居ります。それは神樣です。神

様は太陽も雲も風も、凡ての動物も植物もお造りになつて、これををさめられます。

それですから世界で一番強いものは、神様とそのお子のイエス様だけであります。

善き指導者

私たちにとつて指導者は大切なものであります。導く人が善いか惡いかで、その人がよくなるか、惡くなるかきまるものであります。

ファーブルと云ふ有名な昆蟲學者がある時面白い實驗をしました。

ファーブルがある日の事庭に出てゐると、小さい蟲が庭に置いてある水瓶のまはりを、行列をつくつてぐる〳〵と廻はつてゐるのを見つけました。そこでファーブルは蟲が他に行かれない様に小さな垣をこしらへて置きました。すると蟲は同じ所をぐる〳〵といつまでも廻つて居りました。どの蟲もどの蟲も前に行く蟲のあとさへつけて行けばまちがひないと思つて、くつついて行つたものですから、いつまでたつても同じ所を歩くわけです。こんなことを一週間もつづけて蟲たちは、とう〳〵へト〳〵になつて倒れたと云ふことです。

私たち人間もそれと同じことです。世間の人の通りにしてばかりゐると、いつまでも同じ道ばかり歩くことがあります。人のあとに鼻をくつつけて歩くと、歩く必要もなければ値打ちもない道を歩かされることがあると思ひます。

私たちは人生と云ふ長い道を歩くには、どうしてもよい指導者が必要であります。どんな時にも迷はない正しい指導者が必要です。その指導者は主イエスであります。

ビールを家具に

英國のある町に一人の大酒呑がゐて毎日お酒ばかり呑んでゐました。そのために妻も子供も慘めな、ひどい目にあつてゐました。その男が大酒呑みのやくざ者であると云ふことは誰一人として知らぬものはありませんでした。

所がある時、フトしたことから、どう〳〵教會に行きキリストさまの話を聞いて信者になりました。そして酒もピッタリと呑まなくなつてしまひました。

その男がある日一人の呑み友達に出會ひました。友達が申しますには

『君はキリスト教信者になつたと云ふが、ほんたうか』

すると、その人は

『さうだ』と答へました。友人は更に

『そんなら、君は聖書を信ずるのか』とききましたので

『勿論』と答へました。友人は

『そんなら君は聖書にあるイエスさまが水を酒にかへたと云ふ話（ヨハネ傳二の一―一一のカナの奇跡）でも信ずるのか』

『信じますとも、君が僕の家に來て見るなら、僕の家にもそれと同じ様な奇跡が行はれてゐるのを見るにちがひない、僕の家には僕が酒を呑んでゐた頃にはなかつた椅子や、ピヤノ、オールガン、其他の家具が揃つたし、今まで毎日食物さへろくゝ食べなかつた妻や子供がみんな食べられるやうになつたのだ。君はそれらのものがどうして出來たと思ふか、それはみんな僕が呑んでゐた酒がかはつたのだよ、イエスまさを信ずれば酒が品物にかはる、ましてイエスさまが水を酒にしたことが信じられぬ理由はない』と申しました。

他人の幸福

人間がある日美しい馬を捕へやうと追ひかけてゐるのを非利己が見つけて申しました。

「君は馬鹿に急いでるね、走つて一體どうする氣かね」とたづねました。人間は走つたので息を切らしてハーハー言ひながら答へました。

「ソーラ君、あそこに美しい馬が走つてるでせう。僕はあの馬をつかまへやうと思つて走つてゐるのです」

「君はあの馬を捕へてどうする積りです」

「はい人生が僕にあの馬は幸福と云ふ馬だから、つかまへろ、つかまへたら私が幸福になれると云ふからつかまへやうとしてゐるのです」

「すこしはつかまへられそうになつたことがありますか」

「實に殘念です。一度殆ど捕へかけたのですが惜しい所で逃してしまひました。けれども、失望はしません、利己心が私に敎へて、忍耐さへすれば、いつかはきつと捕へられると申しますから」

「君はそりや利己心に欺かれたのだ、あの馬は美しく見ゐるが、あれは『自分の幸福』と云ふ馬で、追へば追ふ程逃げるものだ」

そこまで話が進んできた時人間は殆ど泣き出しさうになつて尋ねました。

「そんならどうしたつて捕へられないのでせうか」

「つかまへる方法がたつた一つある」

「お願ひですから、どうぞ敎へて下さい」

そこで非利己が人間に敎へました。

「あの向ふに建物が見ゐるだらう、あれは『他人の幸福』と云ふ厩だ、あの馬はその中にゐるのだ、それだのに君は厩から追ひ出したから捕へられないのだ」

「そんならどうしたら、もとの厩へ馬は歸つて來ませうか」

「それは君がその他人の幸福と云ふ厩に入つて待つてさへゐればよい、するとあの馬が歸つて來て、君の手から食物を食べ、君のものになる」

と敎へました。

このお話のやうに、私たちは自分たちの幸福ばかり求めてゐては、決して眞の幸福にはなれません。私たちは他人に幸福を與へやうと考へ、また行ふ時自然に私たちも幸福になつて來ます。

信仰

（一）

有名な説教家のムーデーが、ある時町の子供を集めて信仰について話しでゐた時のことであります。

ムーデーは美しい本を取り出して、聽いたゐた一人の子供の前に差し出して「この本を君にあげゐから受取りたまへ」と申しました。けれどその子供は、ムーデーが何んのわけもなく突然自分に呉れる筈はない、きつとからかふのだと思ひますから、どうしても受取らうとしませんでした。そこでムーデーは代る代る子供の前にその本を差出して「君にあげる」と言つても誰一人受け取らうとするものがありませんでした。

けれど、とう〳〵一人の子供が臆病そうに半信半疑で手を出してその本を受取りました。他の子供は驚いて、ほんたうにムーデーがその本を與へたのかどうかを尋ねました。

「無論あの子供にその本を上げたのだ、私は誰れにでもその本を貰ふと云ふ人にあげると言つたぢやないか」と言つて、ムーデーは續いて、信仰とはイエスの言葉を受取つて、それを信ずることだと敎へましたので、子供たちによくわかりました。

（二）

ノールウエイの宣敎師がズウデルランドと云ふ未開の地に行つて信仰の話をいろ〳〵としたあとで、土人たちに呑み込めたかどうかをしるために「信仰とはどんなものか、あなたたちの考へを言つてごらんなさい」と申しました。

すると一人の頭のよい土人の生徒が答へました。

「信仰とはキリストさまと、そのお言葉にしつかり握まつてゐることです。この國の大きな川には渡し人足がゐます。渡し人足が人を渡します前に『私をしつかりつかまへてゐて途中で離してはなりませんよ』と申します。舁がれた人が人足を信じて、しつかりつかまつてゐるなら、安全に對ふ岸に着くことができますが、もし途中で人足を信じないで、離してしまつたら溺れ死んでしまひます。ここに信仰があります。キリストを信じ、しつかり彼につかまつて、人生にどんな事があつても離さないで常にキリストに指導され、その言葉を守つて行ふのが信仰であります」と答へました。

英國皇太子

數年前日本にも來遊されたことのある英國皇太子は大層英國々民の信任と敬愛をうけて居られます。この皇太子に美しいお話が澤山ありますが、その一つを申します。この記事は英國の新聞に出てゐたことであります。

歐洲大戰中皇太子は度々負傷病者の病院を見舞はれましたが、ある時のことであります。砲彈や火焔のため醜くも顏や形のかはつた負傷者の中を一々皇太子は見舞つてあるかれました。中にはまるで悲劇とでも言はれるやうな貌の負傷者もありました。

あまりにひどい負傷者には殿下がお見舞ひにならぬ方がよいと病院の當局者が申しました。けれども殿下は强ひてその人々に面會して、丁寧にやさしい言葉をかけて、感謝の言葉を述べてあるかれました。負傷者たちはその有り難さ

や勿體なさに感泣しない者はありませんでした。

皇太子が病院を一巡したあとで「もう一人も殘つては居らぬか」とお訊ねになりました。

「もう一人だけあります」と當局者は答へざるを得ませんでした。

「その人を私は見舞ふ」と皇太子は申されました。

當局者は驚いて

「殿下、お會ひにならぬ方がよろしうございます。お會ひ下さつた所で眼も見ねず、耳も聞ねず、何の甲斐もございません。それは恐ろしい格構をして、とても見られはしません、氣の弱い人は見ただけでも卒倒してしまふやうな形になつてゐますから」と答へました。

「それならなほさら見舞はなければならぬ」と皇太子は同情の念をお顔にたたへて申されたので、醫師は恐る恐るその負傷者の室に殿下を案内いたしました。

皇太子はやや蒼白くなつて、頭をたれて靜に病人のそばに歩みよられました。見ることも、聞くことも出來ない、まして手も足も動かせない、まるで難破船のやうな人間の前に立たれた、殿下の兩の頰を傳つて太い涙がハラ〳〵と落ちて來ました。

人々は感に打たれてぢつと頭を垂れてゐますと、殿下は靜にかがんで、その醜いと云ふより恐ろしい、ぞつとする顔に、御自分の顔をつけて接吻をなさいました。

醫師や看護婦たちは思はず有り難さに大聲をあげて泣き出したさうです。

さて神さまの御獨子イエスさまは、惡魔のために傷つけられて、ほんたうに見苦しい有樣になつてゐる人間の心に近づいて下さいます。そして深い思ひやりのあまり、御自分の生命を十字架の上にすてたまひました。誰でもその深い愛にみちたイエスさまを見あげる時に心の見苦しい傷はなほされます。

出口

あるお天氣のよい、ほこりの立つ樣な日のことであります。電燈工夫が深い護謨の長靴を穿いて仕事をして居りました。それを見てゐた小供たちが不思議に思つて尋ねました。

「小父さんは、どうしてこんないいお天氣に長靴なんかはいてゐますか」

電燈工夫は面白いこの質問に思はず仕事の手を休めて子供たちに電氣の話をしてきかせました。

「いや、私はこの長靴を雨よけにはいてゐるのではありません。電氣よけにはいてゐます。あなたたちが知つてゐます樣に電氣は傳はつて行くものがないと力がないのです。私がもし電線にさはつたとしても、その電氣は足の方から土へまた出で行くと、力があるが、護謨靴をはいてゐますと、電氣は外に出られな

いから、私の身體は何ともありません」

と申しました。子供たちはその說明をきいて、電氣は一度入つても、また出て來る出口がないと力がないと云ふことをよく知ることが出來ました。

私たち人間にも同じことがたくさんあります。私たちが愛と云ふことを耳から聞いたり、眼から見たりして心の中に入ります。けれど入つたきりで、また出て行かなければ電氣と同じ樣にその愛は力がありません。心に入つた愛は愛の奉仕となつて、手や足から外に出てはじめて力があるものであります。

赦しについても同じであります。人に赦して貰ふだけでは、赦しの話をきくだけでは何の役にも立ちません。今度は私たちが人を赦してこそ、はじめて効があります。イエスさまは「主の祈」の中にそれを敎へて「我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免したまへ」とお敎へになりました。

これですべて出口の大切なことがわかつたことと思ひます。

水の例をとつて考へて見ませう。谷川を流れて行く澄み切つた水は何んとも言はれぬ美しい、氣もちのよいものであります。この美しい水が琵琶湖だの、中禪寺湖だのに流れ込んで行きます。けれども湖水にはみんな出口があつて、一度入つた水がまた出て行くから美しい湖水があるので、もし何處にも出て行かないとしたらどうでせう。

だん〳〵と湖水の水は多くなつて行きます。そして近所の田も畑も、町や家までみんな水の底に沈んでしまはなければなりません。美しい水も反つて出口がないと害になります。

私たちもよい事を聞いて知るだけで行ひにあらはさないと、だん〳〵物識りだけになつて、强慢な人間になつて反つて惡くなります。

聞いたことを行ひに出すよい人間になりませう。今日すぐ、今すぐから行ひに出そうではありませんか。

神樣は私たちに丈夫な手や足や口と云ふ、善い出口をお與へ下さいましたから。

土地を善くする方法

「何んと云ふ美しい麥畑でせう」とある田舍に來た人が麥畑を見て申しました。よく一面に實つた麥畑は六月の日の光を受けて一層美しく見ねました。

「去年貴方が御出でになつたら、きつと貴方はそんなことは仰有らなかつたに違ひありません。この地面は去年まで荒れはててゐました。深い雜草が一面にはねてゐました。所が去年農業の學者が來て貸してくれと申されたのです」

地主はかう言つてから、また話しつづけました。

「この土地は御覽の通り役に立つ土地ではございませんよ」と私はその學者にお答へしました。けれども、その人は『この土地がどんなに立派になるかを見せる實物教育にするから貸せ』と言はれるのでお貸ししました。それからその學者はこの土地の手入れをして、耕作し今ではこんな立派な畠になりました」

と說明してきかせました。

この土地を畑にした學者はこんなことを言つてきかせました。

このあたりの土地は自然にはみんな良い土地です。私は荒れた土地を見ますと、すぐにその地質を檢査して見ます。そして土地として缺けてゐるもの、即ち化學要素を檢べて見て、その足りない所のものを肥料で補ひ、この土地に適する種子を選びます。この樣に頭を用ひると、役に立たぬ土地が立派な肥沃な土地になります」と申しました。

この話は私たちの心と云ふ地面の譬として面白いと思ひます。私たちは生れた時にはみんな善い心を持つて居ります。しかし善い行ひと云ふ果は生れただけでは結ばないであります。それにはどんな要素が心に缺けてゐるか檢べて見るとわかります。

多分缺けてゐるのは寛大な心、他人を喜ばせやうとする願、世に仕へやうと

する意志、この世に樂をするために生れたのではないと云ふ自覺、キリストを喜ばせ、キリストを愛しやうとする心持ちなどであると思ひます。

私たちも、よく自分の心を檢査し、省みて缺けてゐるものを補つたら、きつとよい果を結ぶやうになれます。

それにはキリストさまの教訓を受入れ、これを實行することが一番大切であります。

怖れに勝つ道

「何故かく臆するか」マルコ傳四の四〇

「何故かく臆するか」と言つてイエスさまは弟子たちをお警めになりました。私たちはどうしたら、臆しない、怖れない人間になることができませうか。

第一に怖れは友人によつて征服されるものであります。一人でゐる時怖ろしいことがあつても、友人があると急に元氣よくなります。私たちは、家庭にゐる時にも、學校にゐる時にも、旅行をする時にも、人生にはすべて友が必要であります。しかもよい友が必要であります。人生で最も良い友はイエスさまであります。

第二に怖れは知識によつて征服されます。經驗が深くなれば怖れはすくなく

なります。知識が多くなれば恐れは無くなります。小さい小供はよく物事に怖れますが、これは知識や經驗がすくないからであります。

幼兒にとつては、蟲は蛇のやうに怖く、犬は狼のやうに、人は盜棒のやうに、暗い所には幽靈や化物が居る樣に思はれますが、大人には何事もわかつてゐるから、大人は怖れません。知識は怖れに勝ちます。

第三に怖れは健康によつて征服されます。病人の心は怖れにみちてゐます。物影は病人の眼の前で躍り出します。けれども强い健康な人には何物も怖ろしくありません。それですから、怖ろしさから逃れ出るには身體を健康にしなくてはなりません。

身體が健康であると共に心も健康でなくてはなりません。心が病氣だと物事が怖ろしく見ゑます。盜人にはすべての人間が警官のやうに思はれると申します。私たちでも何か學校で惡いことをすると平常はやさしい先生でも、怖ろし

く見ゑます。自分の家で何か惡いことをすると、親しい兩親までも怖ろしく思はれます。それですから、私たちは生活を潔く行を正しくして、精神の健全な人にならなくては、怖れに勝つことはできません。精神が健かになれば怖れは飛んでかくれてしまひます。

第四に怖れは信仰によつて征服されます。信仰は怖れの大敵であります。怖れの多い人は信仰のすくない人であります。信仰の多い人は怖れることがすくないものであります。不信仰と怖れはいつも一緒に歩いて居ります。信仰が輝けば怖れはかくれます。怖れは頭を擡げると信仰が沈んでしまひます。

昔支那のある不信仰な男は、外に出ると天が落ちはしないか、山のそばに行くと山がくづれ落ちはしないか、家の中に入ると家が倒れはしないかと、毎日怖れてばかりゐたと云ふ話があります。

私たちが神さまを信じてさへゐれば、神さまはいつもきつと守つて下さるこ

とを疑はねば、何事にも怖れない人間になることができます。

以上申しました友人、知識、健康、信仰の四つが勇敢な高尚な生活に必要であります。そしてこの四つはみんなイエスさまから與へられます。

信仰がほしければイエスさまが下さいます。心の健康を望むなら、それも與へられます。知識を求めるなら、大教師イエスさまが下さいます。友人を求めるなら、イエスさまは兄弟姉妹よりも、もつと近い友、どんなことがあつても私たちを見捨てぬ友となつて下さいます。

饑ゑし子供のために

數年前米國ニユウヨークのある大きなホテルで一千人の男女の大宴會が開かれました。その宴會の會費は一人二千圓と云ふ高いものでありました。それをきいただけでは、皆さんはどんなによい御馳走があつたらうかと想ひませう。また大きい方たちは何んと云ふ贅澤なことをする人もあるものだとお思ひでせう。

所が實際はその反對でありました。食卓の上には贅澤なテエブルかけ所か、裸のままの食卓でありました。銀の食器の代りに鐵のナイフと鐵のフォークと錫のコップと云ふ質素な品ばかりでありました。食物には七面鳥もなければ、上等の肉類も野菜もなく、ただ米とココアのみでありました。どうしてそんな宴會に會費が二千圓も入用かと、不思議に思ふかたがありませうから、お話し致

しませう。

一番上席の司會者の席に一つの空の椅子を置いて「見ないお客」と紙に書いてはつてありました。この見ないお客とは、歐洲大戰のため犧牲になつた三百五十萬人の子供のことでありました。

献立を書いた紙には、ボロ〳〵の着物を着た子供が錫のコップから米を熱心に喰べて「有り難うございます」と云ふ繪が書いてありました。

この宴會の會費の殘りは全部この子供たちに食物や着物を買つて送る金になりました。

この宴會が動機になつて、三千三百萬弗の金が米國で集つて、ヨウロッパの饑ゑてゐる子供に米やパンや、ココアを買つて送ることになり、その他は東部や中央ヨウロッパの病院、孤兒院、食物供給所、病人などへ送られました。

善き黑人

ニューヨークの第五街と云ふ賑やかな通りで、一人の黑人が白人の婦人を助けた話、それは丁度聖書にある善きサマリヤ人のやうな話があります。

第五街の人通りの多い時、一人の婦人が道を横ぎる途中で昏倒しました。そこは急速力の自動車が織るやうに走る所で、通行の白人たちはアッと言つて片唾を呑んで、呆氣にとられ、誰一人としてその婦人を助けやうとする者は出ませんでした。

すると一人の黑人の男が飛び込んでその婦人を安全に人道に助け出しました。フト婦人は氣がついて見ると自分を助けてくれた人が黑人であるので驚いて感謝の言葉さへも發し得ませんでした。通行人も交通巡査も同じやうに、一言も發し得ませんでした。

やがで十歩もその黒人が去つた時交通巡査は氣がついて、その男をよびとめて名前を尋ねました。黒人は振り向いて

「私を捕縛しやうと云ふんですか」とききました。巡査は手を振つて

「いや、勇敢な行爲ですから、報告しやうと思ふのです」と答へました。

「黒坊がしたんだと言つて報告して下さい」とその人は言ひ捨てて、スタ〳〵と去つてしまひました。この黒人こそ、ある大會社の社長をしてゐる、ロバート・モットン博士でありました。

隣人の話

ある日町外れの百姓ジョンの家の前を引越人の荷車が通りかかりました。ジョンは氣輕な、誰れとでもすぐ親しくなれる人でありましたから、引越人にたづねかけました。

「あなたがたは、どちらへお引越しですか」

「はい、私たちは隣の町へ引越すつもりですが、隣村では、近所の人たちはどうでせうか、親切な人が揃つてゐませうか。それとも惡い人が多いでせうか」と引越人は荷車を休めて、汗をふき〳〵尋ねました。百姓ジョンは一寸考へましたが

「この町では御近所の人は如何でしたか」とききました。

「いや、極めて惡るかつたです。人の惡口をいつたり、不親切で、人にどんな

悲しいことがあつてもまるで無頓着でありました。それで私たちは別れるのが悲しい所か、喜んで引越しするのです」と答へました。するとジョンは

「そうですか、すると隣町に御引越しになりましてもお氣の毒ですが、きつと同じやうな惡い御近所の人をお持ちですよ」と答へました。

その翌日ジョンの家の前を、また引越の荷車が通りかかりました。ジョンは前日のやうにまたその人たちに親しく挨拶して、何處に引越すかを尋ねました。すると引越人は

「隣町へ引越すのですが、そこの近所の人たちは如何でせうか」と尋ねました。

ジョンは

「この町では御近所は如何でした」とききますと

「はい、大へんようございました。親切で、考へ深くて、きれい好きで、私たちは、もうお別れするのに泣いた程でありました」と答へました。

「それぢやあ、隣町でもきつと同じやうな、善い隣人をお持ちになるにちがひありません」とジョンは答へました。

引越人が車を曳いて出かけたあとを見送つて、

「これはあたりまへの話だ、親しい友人がほしければ、自分で親しい友人にならなければならぬ、他人の親切が見たかつたら、自分の親切を他人に見せなくてはならぬ」と百性ジョンは獨言を言ひました。

ランフォール卿の幻

「わが兄弟なるこのいと小さき者の一人になしたるは
即ち我になしたるなり」マタイ傳二五の四

ラウエルと云ふ有名な詩人が書いた「ランフォール卿の幻」と云ふ詩の中に美しい傳說が歌つてあります。そのあらましをお話し致しませう。

主の晩餐の時、イエスが弟子たちと葡萄の汁を飲まれた杯を、アリマタヤのヨセフがはる〳〵ユダヤから英國まで持つて參りました。それを騎士たちが嚴重に番をしてゐましたが、一人の番人の不信仰から、どこかへ盜まれてしまひました。

ランフォール卿はその杯の所在を探しに出かけることになりました。卿が

自分の立派な家の門を出た時、一人の癩病人が門前に坐つてゐるのを見かけました。けれど卿はその醜い姿を見た時氣持ちが惡くなつて同情の言葉もかけず金貨を投げつけて、行つてしまひました。

それからランフォール卿は聖杯を探して、幾年か方々を歩きました。けれども、とう〳〵見つからないので、手を空うして、疲れきつて自分の家へ辿りつきました。すると門前にまた一人の癩病人が立つてゐて「おめぐみ」を乞ふて居りました。

卿は今度は出發した時のやうな强慢な態度はとりませんでした。なぜなら、卿は旅を幾年かする間、いろ〳〵の苦しみをなめ、人の同情や親切がどんなに嬉しいものであるかと云ふことをよく知り拔いて居りましたから、それで自分が出發する時門前でどんなに不親切な態度をとつたかを思ひ出して後悔しました。

それで今度は、自分が持つてゐたパンを出して、その乞食に分けてやり、自分もたべました。それから自分が持つてゐた杯に水を汲んで來て、癩病人の乞食に與へ自分も亦それを飲みました。

するとその時突然光がさして來ました。そこには最早癩病人はゐないで、輝く高い美はしい姿が見ねました。その姿から次のやうな言葉が洩れました。

「お前は幾春秋を空しく
聖杯を探しに歩いた
けれど見よ、お前がいま
私のために水を汲んだその杯こそ
お前が探す聖杯である
お前がたべたそのパンは
お前のために割かれた私の肉

その水は十字架に流した
私の血しほである
主の晩餐は、人の乏しき時
共に分つ時にのみ守られる
與へることではない、共に分つことである
施物と共に自分を與へる者は
自分と、主と、饑ゑた人との
三人を養ふのである」と。

正しい報い

ある金持ちの女が神に召される夢を見ました。

彼女は天の使に案内されて天國へと近づいて參りました。天國へ入ると一つの美しい家が見ゐました。彼女は自分もこんな家にすませて貰ひたいものだと思ひながら、尋ねました。

「あの家はたれのですか」と。すると天の使は

「あれはあなたの家の庭造りが貰ふ家であります」と答へました。

汚い家に住まつてゐるうちの庭造りの身分で、どうしてあんな美しい立派なお家を貰ふのでせう」と彼女は驚きながら尋ねましたが、天の使は何事も答へませんでした。

彼女は心の中で、庭造りでさへ天國に來れば、こんな立派な家を貰ふのだから、自分にはどんなに立派な家が貰へるか知れないと思つて、心まちにして天の使のあとについて參りました。

すると、ある質素な平凡な家の前に彼女を連れて來て天の使は

「これがあなたのお家です」と申しました。

「私は地上では、もつと善いお家に住つてゐましたが、これは何かおまちがひではありませんでせうか」と彼女は怪しみながら尋ねました。天の使は

「いゝゑ、まちがひではありません、神樣はあなたが地上から送つた材料で出來る一番良い家をお作りになつたのです」と氣の毒そうに答へました。

イエスさまの足跡

スコットランドのインバーネスと云ふ所に大きな石に人間の足跡が殘つてゐます。これは多分昔、まだこの石が砂で柔かつた頃たれかが足跡を殘して行つたのが、かたまつて殘つたのでせう。

昔この所に住んだ部落の人は、酋長が死ぬると、次に酋長になる人が、この石の足跡に自分の足を入れて「今からは前の酋長の足跡を踏み、この部落のために前酋長の如く盡し、働くこと」を誓ふ習慣になつてをりました。

イエスがお殘しになつた足跡があります。それは立派で、勇ましくて、親切な行爲の足跡であります。私たちもこの足跡に從づて行きませう。この足跡に自分の足を入れて、他人とイエスさまと神さまのために生き、働き、イエスさまに生涯從ふことを誓はふではありませんか。

「なんぢらもし我を愛せば、わがいましめを守らん」（ヨハネ傳十四の十五）とはイエスさまのお言葉であります。

善き果

ある果樹園で樹々が自分こそ一番立派な樹であると言つて互に自慢しはじめました。

すると園主が一人のお客を連れて入つて來て、色々と説明して聞かせる姿を見たので、果樹はみんなだまつてしまひました。園主は道の側の樹をさして

「この木の果實はまるでなつてゐません。こんな道ばたにそれかと言つて良い木を植ゑるわけにも行きませんからまあ伐らないでおくのです」と申しました。

次にはさつき自慢してゐた木をさして

「この木は外見立派に見ゑますが、その實は空駄目です。近いうちに伐つてしまつて、他の木を植ゑかへやうと思つてゐます」と園主は申しました。

「そんならこの木はどうですか」と客はさつき他の木から笑はれてゐた木をさ

しました。

「この木は大へん大切にしてゐる木です。どうしてこんな端の方にあるか知りませんが、何を言つてもその果實がいいのですから」と主人は答へました。

今度は二人は大きな梨の木のそばに來ました。

「この木は馬鹿に早く成長しますが一向實がなりません。徒に枝ばかりはつて、邪魔になつて困ります」と説明しました。今度はこれもさつき樹々が爭つてゐた時ウンと威張つてゐた木の番になりました。客が

「この木はどうです」とききますと主人が

「この木も近頃どうも駄目です。果が大へん惡るくなりました。一つ新しい土を持つて來て、すこし手入れをして見ませう。それで駄目でしたら切るより他ありません、だがここに一本いいものがありますよ」

と言つて主人は指さしました。その木は見かけのよくない小さい木でありま

した。

「これはここで一番自慢の木です。素敵にいい梨がなりますから」と園主はほこり顔に客に説明してきかせました。

二人が去つたあとで樹々は「私たちの善惡はその果できめられるのなら、もつと考へ直さなくてはならぬ」とめい〳〵が申しました。

私たち人間も同じことであります。外見、容貌、地位、名譽、財産などでその人の値打はきめられません。私たちが他人のためにつくす善い行によつて大園主なる神は私たちの値打をおきめになります。

良き實を結ぶ秘訣

「われは葡萄の木、なんぢらは枝なり」（ヨハネ傳十五の五）

英國のテームス河のほとりハンプトンの葡萄の樹が健全に成長してゐましたが實のりがすくないので葡萄作りは失望してゐました。所がある年、房もたわわに實のりました。何事にも研究好きな國民のことて、すぐにその理由を知らうと思つて、葡萄の樹の根を堀つて見ました。するとかなり遠くはなれたテームス河までその根がとどいてゐて、河から必要な水分を取ることができるやうになりましたから、よく實のつたのでありました。

このことから信者の生活に行ひの實をみのらせる秘訣を知ることができます信者が日々の力の源、よい行ひをする力をキリストから受けることが大切で

あります。むつかしい言葉で申しますなら、キリストと生命的結合をすること
がその秘訣であります。
「われは葡萄の樹、汝らはその枝なり」とイエスさまは申されましたが、枝は直
接土から營養を取ることはできません。ただ幹を通してのみ營養を取れます。
私たちが良き生活の實を結ぶためには、しつかりとイエスさまについてゐなく
てはなりません。

キリストを着る

主イエス・キリストを衣よ（ロマ書十三の十四）

むかしペルシャ王家には極めて面白い習慣がありました。ペルシヤの新王の戴冠式の時には、新王は寶玉をちりばめてたペルシヤ王祖クロスが着た着物をきることになつて居りました。

これは新王にこの國の大先祖、大建設者を思ひ出させ、眞似させるためでありました。彼等はクロス王の温和な性質、優れた行爲、高尚な愛國心などを眞似得るためにその着物を着るのでありました。

パウロは私共に「主イエス・キリストを着よ」と敎へてゐます。イエスさまをきるとは、ただイエスさまの名だけをきて「私はクリスチャンであります。

私はキリストのものであります」と口さきでだけ言つて、禮拜の形式や義務を守るだけでは足りません。信者らしい生活をすることが一番大切で、これを缺いでは何にもなりません。キリストのやうになり、キリストがお考へになつた様な考へを持ち、キリストがお感じになつたやうな感じをもち、その結果キリストがされたやうな行ひをしなければなりません。

イエスさまは謙遜で、温和で、純潔で、祈り深い方でありました。イエスさまはまた服從、誠實、愛に富み、利己的で無く、他人の犧牲になりました。私たちもそのやうにならなければなりません。

樹木はどうして綠の葉の美しい着物をき、果實の房を結びますか。薔薇の木はどうして夏のはじめ美しい香り高い花を咲かせますか。電燈は如何して輝く光をてらし部屋や町をあかるくしますか。樹木、果物、薔薇、電燈などは内からかくれた生命に養はれてゐます。その美と榮を外からでなく、内から着て居

ります。

私たちも同じ様であります。柔和、善良、純潔、誠實、愛などの果を結ぶことは、木が花や果實をもち、電燈が光をてらすと同じであります。外からきただけでは自分のものにはなりません。

私たちは、私たちの心の中に住み給ふイエス・キリストの精神を通してすべてこれらの道を見出すことができます。イエスを心に着ることによつてのみ得られます。（ラムゼイ氏）

イエスに從ふ

有名な宣教師で探險家のフレデリック、アーノート氏がある時、黑人の子供を連れて、草深いアフリカの山路を通つて居りました。

すると突然一匹の獅子が飛び出して、牙を鳴らして一番あとから來る子供に飛びかからうとしました。それを見たアーノート氏は飛んで行つて、大手を擴げて獅子と子供の間に立ちふさがりました。アーノート氏の權幕に驚いたのは獅子で、尾を卷いて逃げてしまひました。

黑人の子供のために一命を投げ捨てやうとしたこの一白人宣教師の話をきいたアフリカ人の酋長は感歎して「私はその宣教師のためなら何處へでも從つて行く」と申しました。

その子供よりも、もつと恐ろしい運命のもとにある私たちを救ふために、生

命を捨て給ふたイエスさまのために、何處までも從つて行かうとは思ひませんか。

カルヴアリ・クローバー

イエスさまの死を思ひ出させる植物があります。その名をカルヴアリ・クローバーと申します。

その葉は三つに分れて、それが一緒になつた所が血のにじんだやうに紅くなつて居ります。

その花は夕方閉ぢて、丁度祈るために合掌するやうな形になります。花の上部は頭を垂れて服從するやうに傾きます。

猶も不思議な事には、その花の果のる袋は、まはりが鋸の齒の形をした圓いかたちで、丁度茨の冠の様であります。この植物の名をカルヴアリ・クローバーとよぶのはふさはしいと思ひます。

私たちは心の中にこの花を成長させなければなりません。これは愛の花であ

ります。何故ならこの花は私たちに、イエスが十字架上に血を流し給ふたと云ふことを思ひ出させてくれます。

次にこの花は毎朝、毎夕、神に語る祈りの花であります。またこの花は命令があつた時には、頭を下げてきく從順な服從の花であります。

次にこの花は犧牲の行ひによつて播かれます。犧牲の行は容易くはありません。何故なら刺がありますから。けれど犧牲の精神がありますなら、愛と祈と服從の花は愛する主を讃美するために咲きませう。

神の磁石

磁石を見た事がありますか。鋼鐵で作られた馬のかなぐつの様な形をした磁石が、小さい金屬を引きつけるのを見ましたでせう。鋼鐵がどうしてこんな不思議な力を持つことができますか。磁石はどうして作るか知つてゐますか。

こんな不思議な力を持つ磁石は容易く作られます。鋼鐵を大きな磁石の側に持つて來て、何度も何度もすりつけます。さわつてゐるうちに、いつか磁石の力が新しい鋼鐵にも乘り移つて行つて、磁石になつてしまひます。今まですこしも金屬を引きつける力の無かつた鋼鐵が磁石にふれたため、他の金屬を引きつける力を與へられたのです。

イエスさまは神の力を自分の一身に持つてゐた、磁石のやうな人でありました。イエスさまの側には子供も大人も大勢の人が引きつけられて參りました。

最後の御說敎の時「我もし地より擧げられなば、凡ての人を集めん」と申されましたが、その通り長い歷史を通じて、イエスさまに引きつけられる人々は、だん〳〵と加はつて行つて、今に世界中の人々が悉くイエスさまを信ずるやうになると思ひます。不思議な磁石ではありませんか。

イエスさまが持つてゐたこの磁力を貰つた人がありませうか。あります。第一に貰つた人はイエスのお弟子たちであります。お弟子たちは、三ヶ年のあひだイエスさまの側にゐて、イエスさまのお言葉や行を見聞きし、イエスに祈つて頂きました。そして大きな磁石にふれた鋼鐵のやうに、弟子たちは新しい小さい磁石になつてしまひました。そして人々を集め、人々をまた新しい磁石にしました。

即ちお弟子たちはイエスさまを知つてゐると人々に敎へました。言葉で知つてゐるだけでなく、イエスさまを知るとはどんなことかと言ふ事を行ひでもつ

て教へました。イエスさまのやうな親切な寛大な行ひを示しました。それを見て人々はイエスさまを信ずるやうになりました。

あなたたちもイエスさまのやうな磁石になりたいとは思ひませんか。イエスさまを信じイエスさまに近より、イエスさまにふれるなら、イエスさまのやうな神の磁力を持つた新しい小さな磁石になることができます。

神の感化　聖靈

太陽は眩しくてまともに見ることは出來ませんが、その暖い熱を受けることは誰も好みます。私たちがぢつと眼を閉ぢてゐても、あたたまりを感じて太陽が照つてゐると云ふことを知ることができます。太陽は非常に遠い所にありますが、私たちはその感化を受けることができます。太陽から來るものが私たちに熱を與へ、それが種子や植物に來て、地から芽を出し、蕾や花を持たせます。これが太陽の感化であります。

机の上の花瓶に薔薇の花が差してあるなら、眼を閉じてゐても、その香で薔薇の花があると云ふことを知ることができます。香が薔薇の感化であります。

流れは水車を廻し、水力電氣を起し、流れにさらされたものを清めます。私たちは眼の前には流れのほんの一部分しか見ませぬが、その働きを見て、水

の流れがどんなに大きなものであるかと云ふことを知ります。

日光が太陽の一部分であり、香りが薔薇の一部であるやうに、流れの働く力でもつて、眼に見ゐる川の流れは、大きな流れの一部であると云ふことを知ります。

同じやうに聖靈は神の感化であります。それは神から來ますが、日光が太陽と同じものであり、香りがばらと同一であり、流れが川と同じものであるやうに、聖靈は神と同じであります。

私たちが愛と寛大とをもつた我儘な心のない少年少女を見ました時、その心が親切な言葉や行になつて溢れ出るのを見ました時、その少年少女に正しい事をさせる強い感化を見ました時、神の聖靈、言ひかへれば神の聖い感化がその少年少女の心の中にあると言ふことを知ります。

私たちは聖靈を見たり、觸つたりすることはできませぬが、聖靈の愛と力を

感じて認めることができます。私たちが正しいことをしやうと云ふ願ひを覺ゐました時、親切な行をしやうと思ひました時、親切な言葉をかけやうと思ひました時、私たちの心の中に聖靈が宿つてそれをさせて下さるのだと云ふことを知ります。凡ての心に喜びと、愛と善良を送り、それを神の心のやうにするのが聖靈の働きであります。

親元

川の中で砂金を拾ふ人たちの繪を見たことはありませんか。砂の中や小石の中から、小さな金塊を拾ひ出します。

けれど金塊があるとしますと、その金塊がくづれ落ちた親元の大きな金塊のついた岩石があることが想像されます。それで金塊を探す人は、さらにその金塊の親元を探します。

私たちは人間の心の中に金魂のやうな、尊い親切な善良な心を見ます。そしてこんないい心は偶然に出來たものでなくて、きつとその親元があると思ひます。その親元は神樣のお心であります。

例へばアシジのフランシスのことを考へて見ます。フランシスがある日アシジの郊外を馬に乘つて歩いて居りました。すると途中で一人の癩病人が路傍に

坐つて、何かほどこしを乞ふて居りました。フランシスは別に氣にもとめず馬を乘り過しました。けれど考へて見ると、この癩病人をそのままにして置くのが氣の毒でたまらなく思はれました。

それでフランシスは引返へして自分の家へ行つて施物を持つて歩いてその癩病人の所へ參りました。そして施物を與へますと、癩病人は恐る〳〵その きたない手を出して受取りました。するとフランシスはいきなりそのきたない癩病人の手を持つてそれに接吻をしました。

フランシスのこの美しい話を聞いた時、その美しい心の親元である神の美しい心を思はずには居られません。

私たちがよく知つてゐますステバノの例をとつて考へても同じであります。すこしも恐れず、喜んで主のために石で打たれ、そして自分を石でうつ人のために許しを神に祈つたあのステバノの事を考へましても、ステバノにこんな心を

與へた親元なる神の事を思はずには居られません。

その他弱い人のために、船が難破した時ボートを護つて自分は溺死した水夫の話、小さい子供を火事の時救ひ出して、自分は焼死にした看護婦の話などをきいた時、きつと親元なる神を思ひ出します。

私たちも砂金拾ひが砂金を見つけた時、その親元の金塊を探しますやうに、人間の心に美しい心を見つけました時、その親元なる神の心を探し、その心を分けて貰ふやうにしたいと思ひます。

楓の實

春さき、まだ楓の葉が出て來ないまへに、二つ宛つづいた羽のやうな形をしたものが、楓の枝に付いてゐるのが見ねます。

暫くすると、それが方々へ風にその羽を飜へしながら飛んで行きます。これは楓の實であります。この實はかうして遠くの地面に落ちて、自分と同じ木が生ゐるやうに、その果に羽をつけて散布するのであります。

楓の木はまづ自分の裝ひからさきにしやうと言つて、その葉をつけません。

「私は自分の着物の事ばかり考へてゐて、種子のことなんかちつとも考へませんでした、もうおそくなつてしやうがありません」と後悔するやうなことはありません。

毎年楓の木はその實を一番さきに實のらせます。そしてそれに羽をつけて飛

ばせ、自分が老年になつて枯死した時、代りになる新しい楓の木を生じさせることを一番さきにつとめて居ります。

私共基督を信じたものは第一に自分のことばかり考へてはなりません。丁度楓の木の葉のやうに、自分のことは忘れて、他の人たちにこの喜びの福音を傳へなければなりません。

「種子を播く者はみ言葉を播くなり」とイエスさまは仰せられてゐます。私共はイエスさまのみ言葉を人々に傳へるのが一番さきにすべき、又一番大切な務であります。

退却しない人

米國のある大學の校庭に歐洲大戰に戰死した一人の學生のために記念碑を建ててあります。その碑に「彼は苦戰したが退却しなかつた」と刻してあります。

戰死した學生の名はハンソンと言ひます。彼は學生時代にフット、ボールの選手でありましたが、どんなことがあつても退かないと云ふのが彼の精神でありました。フット、ボール試合に一番大切なことは申すまでも無く退かないことであります。戰場に出ても運動と同じ精神でハンソンは、どんなに惡戰苦鬪しても退かない覺悟でやつて行きました。

けれどある時義勇隊に應募して敵陣に進み戰死しました。彼は戰死しましたが、彼の精神は長く母校に記念碑となつて學生たちをはげまして居ります。

イエスさまは弟子たちに「手を鋤につけて後を省みる者は神の國にふさはし

くない」と言つて、後を見たり、退いたりする者を警められました。私たち信仰に志す者にもこの考へが大切であります。イエスさまに從はうと決心した者はどんなことがあつても他の物を省み、それに心を奪はれてはなりません。友人が惡く言つたとか、冷やかした位でやめるやうな意氣地無しになつてはなりません。日曜學校の生徒も同じことであります。折角日曜學校に行かうと決心した者は、どんなことがあつてもやめてはなりません。面白くないとか他に面白い遊び場があるとか言ふやうなことでやめる人は、軍人が戰がいやになつたと言つて退軍したり、運動家が運動最中に逃げだすと同じ卑怯者であります。

「彼は苦戰したが退却しなかつた」とは運動家としても、軍人としても何んと立派な精神ではありませんか。日本人は勇敢で決して退却しないと申しますが、私共日曜學校の生徒も、イエスさまに從つて決して退却しない人間にならうではありませんか。

どちらが有難いか

ある醫者で外國に基督教を傳へに行つてゐる宣教師の許へ、土人の夫婦が尋ねて來て、ひれ伏して自分の子供の病氣が癒されたのでお禮を言ひました。

そして

「あなたは神さまであります」と言つて手を合せて拜みかけました。そこで宣教師は「そうではない、眞の神樣を拜みなさい」と申しましたが、夫婦はいつかなことときかないで「いいわ、あなたはほんたうの神樣です。神樣でなくて、どうして死にかかつた私の子供を活き返らすことができませう」と申しました。

そこで宣教師は「そんなら私がお前たちに何か良い物を與へるとして、私の召使にそれを持つて行かせたとする。するとお前たちは、その召使と私とのどちらにお禮を言ふか」と尋ねました。

「そりや無論あなたにお禮を申します」と土人は答へました。「そうだらう。私は神の召使である。神樣が癒しの賜物を私の手を通してお前たちに下さつたのだ。それだから召使の私にでなく、神樣の前にひざまづいてお禮を申しあげなさい」と敎へてきかせましたので、やつと土人にそのわけがわかりました。

丁度そのやうに世界のすべてのものは神樣が私共に下さつたのであります。日光も空氣も水も、木も花も草も、食物も、小鳥も蝶もみんな神樣の賜であります。

けれども人から僅の物を貰つてもお禮を言ふ人はありましても、この神樣の大きなお惠みにお禮を言ふ人は尠いのです。私たちはそんな恩知らずになつてはならぬと思ひます。

キリストを信ずる者の名まへ

新約聖書にはキリストを信ずる者の名まへを五種掲げてあります。各々意味深い名へまであります。

弟子。この名まへはたび〳〵出てまゐります。殊に四福音書では親しい名まへで、イエスさまは特に十二人の弟子を選んで、御敎育になりました。弟子とは先生から敎はり學ぶ意味でありまして、イエスさまは大先生であります。イエスさまの最後の御敎訓に、「凡ての人を弟子とせよ」と仰せられてゐます。「我に學べ」とはイエスさまが常に私共に要求し給ふ所であります。私共はイエスさまに學び、聖書をよく學んで弟子たるものに相應はしい者となりたいと思ひます。

信者。これはもつと密接な關係を言ふ言葉でありまして、學ぶだけでなく、

更にそれに信頼することであります。すべてを信じ、すべてを委せることであります。信者とはイエスさまに人格的に信頼することであります。

兄弟。これは家族關係の意味で、もつと親しい名まへであります。使徒行傳にあります時代の信者たちは文字通りに兄弟姉妹の生活や交りをいたしました。信者を迫害し縛するためにダマスコへやつて參りましたサウロをさへ、アナニヤは兄弟とよんで居ります。

聖徒。次に聖書記者は信者のことを聖徒と呼んでゐます。この語はもと死んだ人を言ふたもので、普通の人から離れてゐると云ふ意味であります。信者たるものは、一般の人とちがつて基督に從ふ聖い生活をすると云ふ意味から言つた言葉であります。私共もよい行ひをして聖徒と言はれるに相應はしくなりたいと思ひます。

クリスチャン。これは「キリストさまの者」といふこと心も身體もすべてキ

リストさまに捧げたものの意味であります。

私共はこの五つの名前のどれにあたりませうか。一生懸命になつてどれにも相應しいものになりたいと思ひます。

金銀は我になし

「金銀は我になし、されど我にあるものを汝に與ふ」

使徒行傳三章の六節

私たちはたれでも、可哀そうな、氣の毒な人を見ますと、すぐに何んとかしてあげたいと思ひます。けれどもある人は「私にお金があつたら、親切をしてあげるのだけれど、お金が無いからしかたがない」とか、「私にはそんな暇が無いから出來ない」とかいつて、折角しやうと思つた親切さへしない人があります。

けれども親切はお金が無ければ出來ないものでありませうか。そうではないと思ひます。しやうと云ふ心さへあればきつとたれにでも、いつでも出來ると思ひます。お金が無くても、親切の出來たお話を一ついたしませう。

汽車は海岸のある小さな停車場に停りました。すると二三十人ばかりの下車

する人の中にまじつて、一人の青ざめた少女が、絶えずせきをしながら、下車して參りました。

すると親切そうな婦人が走りよつて、愉快な面もちで少女を迎へました。

「よくいらつしやいました。私の腕をおつかまへなさいませ。ほんの一足なんです。あの海岸に白い家が見えませう。あれがヘースさんのお家なんです。毎年春になると、十人程もヘースさんの弱いお友達がこの家にお見えになつて、秋には丈夫になつてお歸りなさいますの。まあ、あなたはお咳きになること、でも大丈夫ですわ、いまにきつとよくおなりですから」

「ありがたうございます。御親切に。あなたはきつと私に親切にして下さると思ひますわ」と微笑みながら、可哀そうな店員の少女は答へました。

「いいえ、私ちつとも。私が親切をしてあげるのではございませんわ、ヘースさんがなさるのですわ。私はヘースさんの小間使なんです。私も何か自分であ

なたに御親切をしてあげたいと思ひますのですけれど、私はたつた一錢のお錢も持つてゐませんの。私が頂いたお給金は、みんな兩親の所に送つてしまはなければなりません。けれどヘースさんのお父さまは百萬長者ですわ。ですからどんな事でも出來ますの」と言つて小間使のモウリイは眼に一ぱい涙をたたへました。

二人はしづかに歩みつづけました。彼女の腕はしつかりと病氣の少女の腕をささへてゐました。

「あなたはお小さな部屋が頂けますよ、私はクリームの燒麵麭をこしらへてあげます。私はそれが大好きなんですから」と元氣よくモウリイは申しました。

「あの玄關に立つていらつしやるかたが、ヘースさんですか、まだお若い方ですわね」と少女は尋ねました。

「あなたがジエーンさんですか」と玄關に立つてゐた若い婦人は二人がそこへ

著くと、病氣の少女に尋ねました。「よくいらつしたね、お休みの間たのしく遊んで下さい。二週間は滯在できますのね。このお家の規則はあなたのお部屋にあります。お茶は正六時、消燈は正十時です。明日の朝あなたにお目にかかつて詳しいことを承りませう。私のうちに來た人はみんな私がお調べすることにしてゐますから。お疲れでせうから、どうぞお部屋に行つて、お休みなさいませ」

「だけれど私はこのお家の人ではないわ」と何か考へだして、少女ジエーンは階段を上り熱つくなつて申しました。

モウリイは少女の寢臺の上に枕を積み重ねて、咳の出ないやうに氣もちよくねかせて、大切な物でもいたわるやうにしてから、お茶まで眠るやうに申しました。

モウリイは女主人のことを尊敬して考へました。そしてこの女主人のやうに

自分も神さまのため何か親切をしなければならぬと考へました。

「だけど私は一文のお錢だつて持つてはゐないわ、どうして今日いらつしたお嬢さんに親切を私が出來やう」と囁いて頭を振りました。モウリイの兩眼にはまた大きな涙の露が宿つて居りました。

何んの親切も出來ないと思つたモウリイは、神さまのお目から御覽になれば大きな親切をしてゐるのでありました。

他人のための祈

（一）

お祈りは自分のためにだけ祈るのでは足りません。他人のために祈ることが大切であります。自分のために祈つた祈りをおきき下さる神様は、きつと他人のための祈りもきいて下さいます。他人のためのお祈りがきかれた話をすこしいたしませう。

（二）

これは英國のある說敎家が話したことですが、一人の少女のお祈りが、御者を悔改めさせたと云ふお話です。

ある日御者が自分の友人の家を訪問して、靜に階段を上つてゐますと、部屋

の中で少女の祈り聲が聞ねてゐました。御者はハッとして思はずひざまづいてその少女の祈りに耳を傾けました。

「神樣、どうぞあの御者の小父さんが、お酒を飲まないやうにして下さいませ、あの小父さんは親切で、私のすきな善い方であります。どうぞお酒を飲まない人にして下さいませ」

少女の口からは、かうした祈りの言葉が熱心に出ました。荒くれた御者の鬼のやうな眼からは熱い涙が一人でに流れ出て來ました。御者はそれを堅いざねのやうな手で拭つて、少女の部屋に入つて、脆づいて申しました。

「娘さん、あんたは私の樣な狼のために祈つてくれるのですかい」

「はい、私はいつも祈つて居りました。小父さんは決して狼ではありません私の好きな人間であります」と少女は輝く眼で見あげて答へました。

御者は今まで誰からも聞き得なかつた親切なやさしい言葉を耳にしました。

そのかたくなな心にも神の愛が一人の少女の愛を通して、うるほされました。

それから後、人ごみの市中を馬を驅る時も小父さんは「狼ではありません、私の好きな人間です」と言つた子供の言葉が、愛の羽がはねて、たゞず耳の中に喜びの鐘の音のやうに響いて參りました。

とう〳〵禁酒して、立派な人間になりました。

(三)

ある少女の家では、毎朝外出しない前に、一家揃つて脆づいて祈ることになつてゐました。巴里にこの少女の家族がゐた頃、隣の部屋に一人の婦人が同居してゐました。少女は毎朝お祈りの時、もしや隣りの婦人が自分たちがお祈りすることを知りはすまいかと、耻しく思つて居りました。

所がそれから數年たつたのちのことでありました。少女がある社交的な會に

で出た時、巴里で隣室に間借してゐた婦人が彼女の所に握手を求めに參りました。そしていろ〳〵と彼女の父親がしてくれた親切のお禮を言つて話しました。

「私は大へんな心配事を持つて巴里に居つたことがありました。その頃誰一人として私の相談相手になつてくれるものもありませんし、誰か助けてくれると云ふ望みさへもありませんでした。それは失望のどん底にゐて、今一二歩と云ふ所で、滅亡の淵に沈んだかもわかりませんでした。

その時あなたのお父さんは毎朝、遠くにゐる知らない人々、誘惑にあつてゐる人々、淋しい人々丁度私の樣な者のために祈つて下さいました。私はその時いつでも隣りの私の部屋に脆づいて、そのお祈りを聽いてゐました。その祈りが私に誘惑に勝つ力を與へてくれました。あなたのお父さんの祈りが、私の生命を救つたのです」と婦人は熱心に語りました。彼女は今更ら自分たちの祈りが隣りの婦人に聞ゐはすまいかと心配したことを耻しく思ひました。

（四）

ダウソン博士がウエルスの信仰復興の原因について語つた話があります。

ウエルスのある百姓夫婦が、丘の上の小さい敎會堂に來て、毎日近所の人々の名前を一人一人あげて、その人々の信仰が復興するやうに熱心に祈つて居りました。かうして祈つて居ること二週間目のある日のこと、誰にもしらせなかつた。この夫婦きりの祈禱會にドヤ〳〵と五十人あまりの人々が入つて來ました。

そして神に自分の身も心も献げることを誓ひました。それからこの五十餘人がはたらいて、全ウエルスに一大信仰復興が起つたと云ふことであります。

人のための祈りはこのやうに神にきかれます。

忍耐深き祈

「私はもう二度とお祈りなんか信じません。私は信仰をもつてお母さまの病氣が恢復する樣に祈りました。けれどとう〳〵お母さまは死んでしまひました。何んて神さまは殘酷な方でせう」

と悲しみに、心くづをれし一人の少女は申しました。彼女の友人は色々となぐさめて、お祈りのほんたうの意味を話してきかせました。

あなたはたび〳〵お祈りなさいました。あなたがお祈りなさいましたやうに誰だつて愛する者が死なないやうに祈らないものはございません。けれどあなたは、すべての人が死なないためにお祈りといふ賜物を神樣がお與へ遊したとお思ひなさいますか。

人間が年とつたり、からだが弱くなつたりしても、どうしても死ぬることが

できないとしたら、きつと人間は神樣に死なせて下さいと祈るやうになるとはお思ひになりませんか。神さまがたれの祈りも、かれの祈りも、よしあしに拘はらず、みんなおききさ下るとしたなら、人はもう決して祈らなくなると思ひます。

神樣は私たちのお祈りのよい物だけをお聽き下さるから、お祈りが祝福であります。神樣は祈りに對して何時「否」と云ふべきかをよく御存じであります。

あなたは祈つたとおつしやいました。あなたが祈ることのできるのを神に感謝なさいませ。あなたは希望をもつてお祈りなさいません。信頼をもつてお祈りなさいませ。あなたの今の重荷に勝つ力と、義務の道に從ふ力を日に一度宛お祈りなさいません。あなたはもう決して祈らないと仰言いましたが、どうぞそんなことを言はないでお祈りなさいませ。

時にはお答へのない祈りがあります。あなたの義務を知るために、休みと、

望みと、信賴をお祈りなさいませ、そうすれば平和と勇氣が參ります。けれどもまだ〳〵悲しみはあります。けれども平和と勇氣が悲しみに打ち勝たせてくれます。それがお祈りに對するお答へであります。

その友のすすめをきいて、少女は冷靜な心で再び世界に向ひ、毎日、日々の力を祈りました。彼女の生活が深くなり、品性が立派になるのを見て、その友は彼女の祈りがきかれたことを知りました。

祈りの經驗

ある中年の信者が次の様な告白をしました。

私が洗禮を受けたのは十六歳の時でありました。私は朝夕聖書を讀み、信者の生活をするに必要な力を祈り求めました。祈りは決してきまりきつた文句ではなく、その場合に應じてかはつたものでありました。試驗の前には祈つて力を求めました。日中でも惡いことをすると、すぐにそれを神に打ちあけて赦を祈りました。

けれど、一年たつた頃、自分はまだ立派な信者の行ができぬと云ふ疑ひが出て來ました。けれどそれかと言つて別に自分をとがめもしないで、いつもの通り缺さず教會に出席もすれば、祈りもしました。けれど段々と興味が薄らぎ專門學校に入つてからのちは、當分の間信者であると云ふことをかくしてゐま

した。

ある日私と同室の友人が運動で怪我をして、瀕死の狀態で私の部屋に昇ぎ込まれました。怪我は大したこともありませんでしたが、血が鼻や口から出て來るのに驚きました。友人は私を見ると、大きく眼を見はつて「祈つておくれ」と言つた時のことは今でも忘れません。

その時部屋の中には私たち二人きりでありました。私は脆づいて聲をあげて友のために祈りました。友は祈が終つた時アーメンと附足しました。たつた二分間足らずの祈りでありましたが、祈りが終つた時友の變つてゐるのに驚きました。青かつたその顏には血の色がさし、その眼は希望に輝いて居りました。

けれど更に私自身がかはつてゐるのに驚きました。この祈りによつて私は、はじめて神さまとの交りがわかりました。これまで私の祈は私自身のためだけであつて、人のために祈らなかつたので、私の信仰が力を失つてゐたことがわ

かりました。

信者は人のために祈ることによつて、信仰が保てると云ふことがわかりました。この靈的眞理が友人の負傷によつて、はじめて私に開けて參りました。

神を思ひ出すには

「私は時々自分は信者ではないと思ふことがあります。私は教會へ行つても、どうも興味が湧かなくなりました。信者は神様のことを、一日に何百度となく思ひ出さなければならぬと思ひますが、私はなかなか神様のことが思ひ出せません」と一人の少年が頑固に言ひ張りました。

「君のお父さんが商用か何かで遠くへ旅行したとする、そして一年間も歸つて來ないとすると、君はお父さんのことを容易く思ひ出し得ませんか」と牧師は遠くの方の青い空を見ながら、ゆつくりと尋ねました。

「いいね、そんなこはありません。私が一寸父の側を離れた時、いくらでも父のことを思ひ出し得ます。父が遠くへ行つたとしても、同じことでです。それに手紙が來たり、家で母や妹たちと父の噂をして、歸りを待ちますから、いくらでも思ひ出せます。決して忘れるやうな心配はありません」

と少年は確信深く答へました。牧師はなほも追求して尋ねますには

「手紙が來ないとしたら、父の噂を家でしなくなつたとしたら、どうです、それでも思ひ出せますか」

「大丈夫です。父が殘してくれた家だの、品物だのを見て思ひ出します。すくなくとも暫くの間は。……けれどずつと長くたつと思ひ出せなくなるかもわかりません」と答へて少年は考へ込みました。牧師も考へ深く暫く沈默してゐましたが

「私たちは注意して見るのでなければ、神様は見ねません。また信がなければ見ねるものではありません。私たちが色々とこの世の物事に心を使つたため神の事を忘れると云ふことは不思議ではありません。神様はそれをお考へになつて、父からの毎週の手紙のやうに聖書を、家族のものが集つて噂をする家のや

うに教會をお作りになりました。これで聖書や教會はどんな意味かわかりますでせう」

牧師の平易な説明が少年の胸にはつきりと矢で射られたやうに入つて來ました。

「わかりました。この間私は從妹の家に遊びに行つて聖餐式に出席しませんでした。そのほか私はたび〳〵教會を休んだことがありました。また夏休みの間にたび〳〵日課の聖書を讀まなかつたことがありました。それですから、だん〳〵と神樣を思ひ出せなくなつたのだと云ふことがよくわかりました。私たちが神樣を思ひ出すやうにつとめなければなりませんね」

と少年は答へました。牧師はにこ〳〵しながら

「あなたの考へは正しいです」と答へました。

苦しみにあつた人の信仰

「私は五年間も病氣に苦しんで死んだ人の世話をしました。その人は死ぬるまへにこんなことを申しました。

「神樣があはれみ深くて、力がおありだつたら、何故惡の存在をお許しになるでせうか、それとも神さまはないのでせうか、看護婦さん」

その人はこんな質問を幾度もいくたびも繰りかへしていましたが、私は充分お答へができませんでした。お祖父さん、あなたはこんな場合に何んとお答へになりますか」

と病院に働いてゐる若い一人の看護婦は休みで自分の家に歸つた時祖父に尋ねました。祖父はぢつとそれを聽いてゐましたが、やがて確信深く答へました。

「私は經濟界の不況から銀行預金をすつかり無くした。それに最近醫者は私を

胃癌でもう長く生きることはできぬと宣告した。私のかうした苦しさをお前は知つてゐるだらう」

「お祖父さんの様な人に迷惑をかけたことのない、いつも神様に信頼してゐる方にもそんな不幸なことがあるのでせうか」と彼女は驚きの眼を見張つた。

私は疑ふこともある、けれども疑ふことが無かつたらどうして信仰が役に立つ犠牲を拂はされることもあるが、犠牲が無つたら我儘になる。誰もが自分に罪を犯さなかつたら、あはれみ深くはなれぬ……。

迫害の危險の中に立たなかつたら、どうして勇氣と忠誠を示すことができる。試錬が無かつたら英雄、殉教者、正直者は出ないぢやないか、私の信仰――それは古くさいかも知れぬが――確な礎の上に置いてある

かれはかく語つて孫娘がそばにゐることも忘れて、考へ込んでゐました。彼女はつと立ち上るとオルガンで小さい時習つた讃美歌を彈いて歌ひました。

主のたふときみ言葉は
ゆるぎなき道のもとゐ
たよる我はやすけしや
世にはまたなきみ言葉

彈き終ると「また誰かが同じ質問をするだらうから病院へ歸らう」と囁いて彼女は祖父に別れをつげました。祖父は考へ深く

私が苦しみにあはなかつたなら、こんな答へはできなかつたにちがひないと申しました。

彼女は歸つて來た時よりも、もつと足輕く、希望に輝いて病院へと急ぎました。

あはれみある者

「幸福なるかな、あはれみある者、その人はあはれみを得ん」マタイ傳五の七

（一）

伊太利のフローレンス市に行くと、大きな美しい大理石の寺院が廣場に立つてゐるのが見ゐます。今から六百年前この寺院の蔭で駕舁が、日中の暑い間大勢で休んでゐました。その頃は馬車や荷車が無いので、婦人たちは駕に乗つて歩きました。それで駕舁は今の辻待ち車夫のやうにお客のあるまで待つてゐました。

この人たちは暇な時いろんな無駄話をして、人の惡口を言つたり、時には神

を惡く言つたりしました。それを聞いて殘念に思つたピエートロ・ボルシと云ふ人が考へて、今度から神をけがす樣なことを言つた人は罰金を出すと云ふ約束を駕舁たちにだしました。

間もなく、罰金で幾らかのお金ができましたので、それで駕を一つ買つて、町に病人が出來たとか、怪我人ができた時、その人を順番で病院にかついで行くと言ふ約束をしました。

この小さいことが原因になつて、病人や弱い人を助けると言ふ大きな團體ができ、駕舁ばかりでなく、商人も知識階級の人も貴族も加はつて、慈悲兄弟會と云ふ名をつけて、誰もかれもこれに加はるのを名譽とするやうになりました。

この會はそれからずつと六百年間もつづいて、今でもあります。この會の人たちは毎日寺院の中の小さな教會に集つて祈禱會を開きます。身體中黑い衣物を着、頭にも黑い帽子をかむり、顏には黑いマスクをつけ、自分たちのした善

事を誰がしたかわからぬやうにしてゐます。

この人たちは教會に集つてゐて仕事を待ちます。ある人は駕舁き、ある人は病人の看護、ある人は死人の世話をします。町で用事があると云ふベルのなるのを聞いたものは、貴族でも勞働者でも、すぐに自分の仕事は捨ておいて、慈善の仕事をします。決して謝禮は一杯の水より他には貰つてはならぬことになつてゐます。

大へん美しいことで、こんな會の會員になることは名譽であります。けれど私たちは伊太利に行き、黒い衣服をつけないでも、何會と云ふ名前をつけなくても、慈悲兄弟姉妹會に屬することができます。お禮を貰ふためでなく、心から慈善をする人は誰でもピエートロ・ボルシの弟子になることができます。

（二）

貧乏人でも金持ちでも、たれでも動物にあはれみをほどこすことができます。だまつてゐる動物を幸福にしてやるのは私共人間の義務であります。ある所に子供たちが「猫いぢめ會」と言ふのを作りましたが、ぢき無くなりました。こんな會が長くつづくわけはありません。またある所にはがまを殺さない會と言ふのがありました。私たちは殺さないより、もつと進んで動物に親切であるやうにしたいと思ひます。

（三）

次に私たちが慈悲をする道は、私共の近くにゐる人で困つてゐる人や、助けを求める人を助けることであります。自分よりも、もつと貧乏な人を助けることのできないやうな貧乏人はゐない筈であります。

ロンドンの東にある學校に、五百人程の貧しい饑ゑてゐる子供たちがスープ

を飲みに來ました。一同がスープを飲み始めやうとしました時一人の紳士が立つて

「これだけのスープでは五百人全部が飲む程無いがどうしたらよからうか」と言ひました。

「女の子たちにやつて下さい」と男の子供たちが口をそろへて申しました。それで女の子たちがたべましたが、まだ殘つてゐましたので、その紳士が

「もうすこし殘つたが、どうしやうか」と申しますと

「弱い男の子たちにおやり下さい」と丈夫な男の子たちが言つて、空いたお腹をかかへて不平な顏もせず歸つて行きました。

（四）

あはれみをほどこされて、それに感じてよい人間になつた人は澤山あります。

その一つをお話しませう。

クリミヤ戰爭の時、英國のクラーレンス、バゲット大將が英國バルチツク艦隊の一艦を指揮しました。或日のことダットレイと言ふ水兵が惡事をしたのがわかつて、大將の前へ連れて來られました。この男はいつも惡いことばかりしますので、黑羊とあだ名をつけられ、誰もこの男には善い所は針のさきほども無いと申しました。

それで大將はこの男を鞭打つやうに部下に命じました。その男は打たれるうちに改心して、今からは何んでも親切なことをすると申しましたので、その罪を赦し、罪を犯さなかつた前と同樣に取扱ふことにしました。

數週間の後、艦内にコレラが發生しました。すると軍醫が自分の部下にダットレイと言ふ水兵がゐて、自分の片腕になつて夜も晝も忘れてよく働いてくれると報告しました。大將はそれをきいて、大そう感激してその水兵をよんで厚

く禮をのべました。併しその夜ダットレイはコレラに感染して死んでしまひました。すこしも善い所が無いと言はれた男が、あはれみをほどこされたので人を救ふために自分の生命をすてるやうな人になりました。

（五）

私たちは何故あはれみ深くなければなりませんでせうか。何故なら私たちはみんな神のあはれみが無ければ生きて行かれないからであります。

ゲオルギヤの總督が自分の部下に酒を盗まれたので怒つてその部下を鞭でうつことを命じました。すると大臣が赦してやつて下さいと懇願しました。けれど總督は首を振つていつかな赦しませんでした。その時大臣は面白いことを申しました。

「閣下も赦して貰はなければならぬ時がありますから赦しておやり下さい」と。

次に私共があはれみ深くしないと、自分の心がいつまでも幸福に愉快にはなれません。自分が人を赦してこそ、自分の心も愉快であります。

レオナード・ダビンチが有名な「最後の晩餐」の繪を書いてゐる時の話であります。ある人の顔がユダに似てゐるのでそれに似せてユダをかきました。するとその人が怒つてダビンチの所にどなり込みました。それ以來ダビンチは自分の畫をかく邪魔をしたその男のことを憎んで居りました。

それから彼はイエスの顔をかきかけましたが、どうしても思ふ樣に書けませんでした。再三かき直しましたがみんな駄目でありました。そこで彼は思ひ直し、その男を赦し、ユダの顔を塗りつぶして、他のモデルでかき直しました。それで始めて心が晴々して、今度はイエスのお顔を思ふやうにかくことができました。

私たちは自分が人のあはれみを要するから、人をあはれまなければなりませ

ん。私たちが人を赦さない時には自分の心も赦されませんから、あはれみ深くなければなりません。

殊にイエスがすべての者を愛し、あはれみ深い方でありますから、私共もあはれみ深くなければなりません。私たちが主に似やうと思ふなら、あはれみと愛の心をあたたかく保たなければなりません。（ヘスチングス氏の説教の大意）

二里の道

「人もし汝に一里ゆくことを強ひなば共に二里行け」

（マタイ傳五の四一）

（一）

イエスさま御誕生の五百年程前、イスラエル人がバビロンに捕虜になつてゐた頃、ペルシャにクロスと云ふ王がありました。その頃は今のやうに郵便局もなければ郵便配達夫もゐませんでした。それでクロス王は自分の命令が國中に行き渡る方法を考へ出しました。

それは國中の主な國道に都合のいい間隔を置いて、驛を設け、そこに人や馬を留めておきました。王が勅令や手紙を出したい時には、飛脚を各方面の國道

の第一の驛に送りました。そこから第二の飛脚が出て第二の驛に傳へて王の命令は國中に行き渡りました。

しかし時にはこの飛脚を助ける人や、馬、船、車などが要るので、その時は來合はせた船、馬、人を使ふことが許されてありました。王やその代理の命令に叛くことを恐れて、誰もこの役を拒むものはありませんでした。けれどこの不便な法律に内々不平を言ふものはありました。

キリストの時代にはローマ帝國がユダヤを征服して、ローマはこのペルシヤの習慣をユダヤに應用しました。ローマの軍人がユダヤを旅行します時、人民や馬に自分の荷物を持つて行かせました。それでユダヤ人はこの習慣をきらつて居りました。ユダヤ人はローマの支配のもとにあるので、やむを得ずこれに從ふので、内心はそれに叛いて居りました。

イエスさまがここに第二里と言はれたのはこの習慣に對してでありました。

「人もし汝に一里行くことを強ひなば共に二里行け」と、それに對して申されたのであります。その深い意味は、人から賴まれたことよりも、もつと多くせよ、自分たちの義務を不精々々にしないで、それ以上のことをせよとお弟子たちに、お命じになつたのであります。

私たちのしなければならぬことで、するにあまり氣もちのよくないことがあります。學校の學課にも、家庭の仕事にも面倒なことがあります。けれども私たちは學校の規則や家庭の習慣にたとひ嫌な時でも從はなければなりません。大人は國の法律に從はなければなりません。そのあるものは愉快でないかも知れません。けれども私たちがこの世の中を愉快に送らうとするには、みんなこれらの規則に從はなければなりません。

（二）

私たちのしなければならぬ事をするのに、二つのしかたがあります。一つはそれを出來るだけ手を省いてすくなくすることで、他の一つは念入りに出來るだけよく多くすることであります。

例へば父親が午後庭の草取りを命じ、それをしたら十錢下さる約束をします。その仕事をするに二通りあります。一つは草をみんな取つて、そこに置きつぱなしにしておいて十錢貰ふことであります。他の一つの方法は、草をみんな念入りに取つてしまつて、それを片づけます。曲つた木があるならそれにつかへ棒をする。路をよくする。この二番目のしかたをするのが、二里の路を行くことであります。私たちが自分の仕事に興味を持てば、求められた事以上をします。

私たちが求められた事以上をなし、何事でも進んで、喜んで不平なしにする時、人のために親切をつくす時、私たちは二里の道を歩いてゐるのであります

そんなら何故二里の道を歩かなければなりませんか、その理由が二つあります。

その一つはそれが一番幸福な奉仕であるからであります。面倒臭がりながら大急ぎでいい加減にやつてしまつて、どこに喜びがありませう。仕事の中に精神を打ち込んで、出來るだけよく成就させたなら、その中から喜びを得ることができます。

そしてこれは他の人も幸福にさせます。少年でも少女でも他の人から、何かするやうに頼まれました時、いやな顔をして、ぐづ〳〵して、如何にも不平らしい顔を人に見せたら、頼んだ人はそれ位なら自分でした方が幾層倍いいかしらんと思ふにちがひありません。

それと反對に、何か人からすることをたのまれました時、自分でそれをするのが好きだと云ふ樣に見せるものがあります。足は地につかないやうに速く、顔は朝の光のやうに輝いて、その仕事をするなら、頼んだ人も幸福を感ずるに

ちがひありません。

（三）

何故二里の道を歩かなければならぬかの、第二の理由はそれが一番よい奉仕であるからであります。眞の奉仕は報酬を考へない時にできます。いつも報酬のことばかり計算してゐますなら、決してよい奉仕はできません。何故ならその時は、どうして手間をすこしで、報酬を多く得やうかとのみ考へるからであります。

むかし、ある豪い王が自分の遠い領土を治めるよい臣下がほしいと思つて、ヘス・アルマンと云ふ臣下を召しました。王はアルマンを自分の庭につれて行つて見せました。王は三つの花園を持つてゐました。いづれも同じ大きさで、同じ形で、同じ木が植ゑてあつて、園の中央に美しい大理石の泉水が立つてゐ

ました。

アルマンがこの三つの花園を見終つた時

「お前はこの三つの花園でどれが一番よいと思ふか」

と王が尋ねました。アルマンが答へますには

「私が思つた通りを申上げますと、私は第一の庭には失望しました。これは充分手當が屆いでゐません。道は踏みにじられ、蟲のついた草花の間には雜草がはゑ、泉水の大理石には土がついて汚れてゐます」

「第二の庭は」

「これはよく手入れがしてあります。道は平で、花は大きく美しく、泉水は清潔であります」

「第三のは」

「これはあまり見事で形容する言葉もございません。その美しさで私の心は喜

びにみたされました。花は香り、空氣は氣もちよく、鳥の囀ずる聲は大理石の上に落ちる水の音樂と調和してゐます。これこそ、ほんたうの完全な庭でございます」

と申しますと、王は

「よろしい、お前はよく見分けた。私は何故同じ庭がこんなにちがふかを話してきかせやう。第一の庭は奴隷が手入れをするので、彼等はただ命じられたまゝに、罰を恐れて働くのである。」

第二の庭は雇つた人が手入れをするのだ。彼等はただ給金の分だけを働くけれど第三の庭は私を愛する忠義な人たちが世話をするのだ。それで彼等はすこしでも手を省くのを滿足しないので心から働くのだ。

さて私は今お前を私の遠い領土を治めに遣はすのであるが、罰を恐れるためや、給金を目あてに働いてくれるな。民を愛し、私を愛するために働いてくれ

それが一番よい治めかたであるから」と王は敎へてきかせました。

みなさんにこの話の意味がわかつたことと思ひます。一番よい奉仕は愛の奉仕であり、報酬を目的としない奉仕であります。正義は私共に一里の道を歩かせますが、愛は二里の道を歩かせます。この道は喜びと自由の道であります。

これは人間の律法と同じく神の律法についてもそうであります。昔神は人間を導き、拘束する必要から十誡をお與へになりました。けれど人はそれをよく守り得ませんでした。それでこれを守らせるためにイエスさまがお出でになりました。イエスさまはこの律法をすてないで、これを成就し、人間がそれを守らなければならぬ新しい理由をお與へになりました。

私たちへも同じであります。私たちは神の律法をイエスさまが心の中にお出でになるまでは、よく守らなかつたり、邪魔にしたりします。しかしイエスさまが私共の生活の中にお入りになつた時一變します。私たちは愛するが故に奉

仕します。この奉仕の中に完全な自由があります。（ヘスチングス氏の說教の大意）

主の葡萄園

「われらのために狐をとらへよ、彼の葡萄園をそこなふ小狐をとらへよ」（雅歌三の一五）

狐は一寸見た所で、美しい毛皮をきた、きれいな尾を垂れた動物であります から、葡萄園に忍び込んでも狐がどんな悪いことをするかを知らない人は、逐ひ出しませんでせう。

けれども狐が葡萄園に忍び込んだのを見逃して、なすままにしておいたとすると、サア大變であります。折角よい實を結ばせやうと骨折つても、狐はそれが無駄になるやうな惡戯をしてしまひます。

私たちの心の葡萄園も同じことであります。私たちが油斷をしてゐると、いつのまにか、ずるい小さな狐が心の中に忍び込んで、す直な善良な私共の心を

あらして惡くしてしまひます。私たちは絶ねず注意して、また絶ねず神に祈つて、狐が忍び込まないやうにしなければなりません。神にいのれば、神はそれに打ち勝ち、勝利を叫ぶ力をお與へ下さいます。

今から、心の葡萄園を荒す狐について考へることにしませう。

この小さな狐の一つは「祈りをしない」ことであります。これはお祈りをしないこと、忘れてゐること、折角おいのりしても他のことを考へてゐたり、何を祈つたか知らないで、口のさきだけで祈ることなどであります。

私たちが先生からお祈りして下さいと言はれて祈ることがあります。けれども口のさきで祈るだけで、その間他のことを考へてゐて、ほんたうに神樣の前に祈る氣もちにならないなら、それはお祈りにはなりません。鸚鵡がお祈りの言葉を敎へられて口眞似すると同じことであります。

ほんたうに心からお祈りをすることは、どんなにむつかしいかと云ふことを

お話しいたしませう。

むかしセント・ベルナードと云ふ聖い人がゐました。この人がアルプスと云ふ瑞西の山を旅行してゐました時の話であります。ベルナードが山を越えてゐますと、突然物かげから一人の追剝が飛び出して、力强い腕に大きな棒を突き出して、ベルナードの馬を吳れろと申しました。

けれどベルナードは神に信賴してゐるわらい先生のことですから、すこしも恐れもせず、騷ぎもせず、追剝に靜に申しました。

「それはお前が馬が欲しいと云ふならあげやう。だが、そのまへに私が言ふことをして吳れたら、お前に馬をあげるとしやう」

追剝はこの落ちついた言葉に幾分か氣を呑まれて、

「そりや、できるならしますよ」と答へました。そこでベルナードは

「お前は主の祈りを諳記してゐるか」を尋ねますと

「憶ねてゐます」と追剝は答へました。

「そんなら諳誦してごらんなさい」

「そりやわけはありません、今しますよ」と盜人が答へますと、ベルナードは「一寸おまち、主の祈をする間、他のことは何も考へてはなりませんよ。他のことはちつとも考へずに、してごらんなさい」と申しました。

そんなこと位は、わけはないと思ひながら、追剝は主の祈をはじめました。けれどもすこし言つたと思ふと、いろんなことが心に浮んで來ました。これではならぬと思ひながら「天にまします我らの父よ」とはじめからやり直しましたが、また途中で他のことを考へ出しました。かうして何度も〳〵やつて見ましたが、なか〳〵できず、とう〳〵

「時に先生、馬だけでなくて、馬具も揃へてくれますか」と思はず、口に出してしまひました。それでとう〳〵約束は駄目になつてしまひました。

この話にありますやうに、一心に祈ると云ふことは難しいことであります。

「お祈りをしないこと」は主の葡萄園を害ふ狐のやうであります。私たちが第一にこの狐を追ひ拂ふまでは、どうしても他の誘惑に勝つことはできません。私たちが他のものに打ち勝つ力を、神様は祈りによつてのみ、お與へ下さいます。それですから第一に一心に祈ることを心がけなければなりません。

第二に葡萄園を荒す狐は不從順であります。不從順は祈りをしないことから出て來ます。何故なら、私たちが神に常に助けを求めるお祈りをしなければ、氣もちよく、速く、愛そよく人に從順であることはできません。

第三の狐はひがんだ性質であります。曲つた、すねた心もちは狐の心によく似てゐます。これも祈りによつて追拂ふことができます。私たちがいつも神様にお祈りする樣でなければ、幼兒イエスさまのやうな平和なにこ〳〵した氣もちにはなれません。

今一つの狐は不信仰であります。狐は自分がづるいものですから、たれもかれも、自分のやうにずるいだらうと思つて、人に信仰を持ちません。この不信仰は一番惡いことであります。これも祈りによつて勝つことができます。

私たちが絶えず祈つてゐるのでなければ、イエスさまがお望みになるやうな葡萄を實らせることはできません。野生な毒のはいつた葡萄が出來てしまひます。けれど私たちが神に祈つて居りますなら、罪に勝つやうに力をお與へ下さいます。祈つてをれば、不信仰に勝つことができます。そうてし私たちは心の葡萄園に主がお望みになるやうな善い葡萄を實らせやうではありませんか。

(J. L. Smith-Dampler, Christ's Little Citizens, P67 の大意)

不思議な燈火

なんぢのみ言葉はわが足の燈火、わが道のひかりなり

(詩篇百十九の百五)

燈火について不思議な話があります。この話は私が小さい時聞いた話であります。

むかしアラディインと云ふ少年がありました。父は早く死んで母親と二人きりで暮らしてゐました。母親は毎日苦しい仕事をして生活費をかせいで居りました。それでアラディインもボロ〳〵の着物をきた貧しい子供でありました。

所がある時町で魔術使が不思議な古ぼけたランプを賣つてゐましたので、親子は自分の家にそれで燈火をともそうと思つた買ひとりました。

そのランプは見かけた所普通のランプとちつともかはつてゐませんが不思議

な力があることがわかりました。母親がそのランプの掃除をしながら「今晩このランプの光の下でお前と一所にたべるおいしいパンがほしいね」と子供に向つて申しました。すると、そこへ何處から出たか、ちやんとおいしいパンが出て來ました。

親子は驚いて、今度はそのランプを持つて「着物が欲しい」「お金がほしい」と言ひますと着物やお金が出て來ました。それで喜んでつづいてお家や馬や馬車を出しました。

それで今度はアラディインは臣下を出して王様の御殿に參りました。王様は丁度隣國と戰爭をしてゐました時ですから、アラディインが大勢の臣下をつれて來たので大喜びで早速一方の大將にして戰爭にやりました。アラディインはランプの力で戰爭に勝ち、とう〳〵王様の養子になり、王様がなくなつたのちには王様になりました。

私は小さい時この話をききながら、ストーブの中で燃えてゐる石炭の炎を見つめました。炎は色々な形に燃えました。家のやうな形、野原、立木や人の顔のやうにも見えました。私はそれを見つめながら、もう一つアラディインが持つてゐたやうな不思議なランプはないかしらと考へました。私がそれを持つてゐると、王様にもなれるし、空の鳥のやうに飛びあるくこともできるしなどと、いろ〳〵と想像して見ました。

こんな願ひを心に畫く子供たちが澤山あると思ひます。冬の長い夜、火の側に坐つてこの話を讀んでから、いろ〳〵と空想を畫いて見る子供が大勢あると思ひます。工場に働く子供が朝暗いうちに起きて、暗いせまい田圃路を工場の方へ行く途中で、アラディインの話を想ひ出して、こんなことを考へる少年もありませう。

「私もアラディインのやうなランプを持つてゐて、こんな寒い暗い路を照らし、

工場に行く路をもつと近くして、私に學校に通ふ時間を與へ、家へ歸へるともつと暖い衣物と、もつとおいしい御馳走が頂けるといいがなあ」と。

けれどこれは多くの人の考へるやうな馬鹿らしい願ひではありません。これはただの夢や幻ではありません。お伽噺の國にあることばかりでもありません。聖書には不思議なランプのことが書いてあります。アラデインに與へたよりも、もつと不思議なランプのことが書いてあります。

このランプは天國に輝いて居ります。それが地上に送られ、人々の心や、家庭や教會を照らし、金や銀よりも、家よりも土地よりも、馬車よりも、馬よりも、もつと私共に善いものであります。これは男の子でも女の子でも持てるもので、いつでも持つてゐることができます。これは預言者や使徒たちが教へた、眞理と生命の不思議なランプで神の言葉の中に輝きます。

（二）

この不思議なランプについて、私はたつた一つのことだけお話しいたしませう。これはその不思議な中でも一番小さいものであります。それはダビテ王が歌つた詩篇の中にある言葉で「なんぢの聖言はわが足の燈火」と云ふのであります。

第一に私は言葉がどうして私共の足の燈火——ランプになるかを話ませう。

七百年餘り前に、ヨウロッパ中から兵隊さんをエルサレムに送つて、主イエスさまの墓を守るために戰つたことがありました。これを十字軍といひます。その時分エルサレムはイエスさまを信じない、獰猛なサラセン人が奪つて居りました。歐州人は、なぜこの主がお眠りになつて居るこの地がこんな不信仰な人々の手に渡つたらうかと考へました。そしてこれを取り返へさなくてはならぬと思つて、英國、佛蘭西、獨逸などから澤山の兵を送りました。この聯合軍は時々はサラセン軍に勝ちましたが、敗けた時もありました。敗けた時には捕

へられて牢に入れられ、奴隷に賣られました。

ある戰ひに敗けた時に、若い英國の軍人、ギルバート・ア・ベケットと云ふ人があつて、敵に捕へられ、奴隷に賣られました。ア・ベケットはサラセン人の富める公爵の奴隷となつて園の手入れに使はれました。公爵の娘が園を散歩してゐる時この英國軍人を見つけました。彼女はア・ベケットの悲しそうな、しかし美しい姿を見て、彼が奴隷であると云ふことを考へて、最初には彼のために泣きました。そして次には彼を愛し、彼を手傳つて逃げ出させやうとしました。

そこである夜、彼女は一隻の小さい舟を海岸に用意しておいて、ア・ベケットの牢の戸を開け、お金を與へて、逃れて英國に歸れとすすめました。

ギルバートは彼女の愛を認めました。そしてその愛に酬いやうと決心しました。ギルバートはいよ〳〵そこを去る時、彼女に

『あなたもいつか、ここを逃れてロンドンへお出でなさい。私はそこであなたを妻として迎へますから』と云つて、娘に接吻し、祝福して、行つてしまひました。

そこで彼は小さい舟に乘つて逃れ、商船をみつけて英國へと歸りました。

けれどサラセンの少女はこの東洋に殘つて居りました。

彼女は毎夜、ギルバートが去つて行つた方を見、彼のことを思ひ、彼を慕つて泣きました。一時一刻も早く彼の側へ行きたいと願ひました。けれど、どうして彼女は自分の家を逃れたらよいでせう。どうして海を渡つたらよいでせうそれに彼女は英語が話せませんでした。彼女が知つてゐる英語は「ロンドンのア・ベケット」だけでありました。この言葉はギルバートが彼女の庭で教へたのでありました。

とう〳〵彼女は東洋に居れなくなりました。彼女は基督者の國に行き、基督

者になり、ギルバート・ア・ベケットの妻にならうと決心しました。そこである夜、ひそかに自分の家を抜け出し、海岸に行き、英國船を見つけて「ロンドンのア・ベケット」と申しました。

彼女が言つた言葉で水兵たちも、おほよそ彼女がロンドンのア・ベケットを尋ねて行くのだと云ふことがわかつて船に乘せました。彼女を乘せた船はやがて錨を卷き、帆を擴げ、嵐にゆられて進んで行きました。

「ロンドンのア・ベケット」彼女はこれだけしか話せませんでした。けれどこれは彼女の燈火となつて彼女のさきに立つて案内しました。路なき所の路となり、そのあとに從つて、とう〳〵彼女は英國海岸の白い岩壁を見ることができました。彼女は戰く足を英國海岸の砂の上に下し、今や愛する人の國の上に立つて居りました。

けれども、まだロンドンへ行くには數十哩歩かなければなりませんでした。

まだ昔のことですから、鐵道もなければ、馬車もなく、大きな道さへもありませんでした。その頃は世が亂れてゐて、盜人は林の中から出て來て旅人の物を盜み、追剝は岩窟にかくれてゐて、人連れすくない旅人を見るとそれを殺して所持品をみんな奪つてしまふのでありました。けれども、そんなことには恐れず彼女はロンドンへと旅行をつづけました。

「ロンドン」「ロンドンのア・ベケット」と彼女は申しました。ロンドンはまだ數十哩離れてゐましたが、この言葉が彼女の道を開き、彼女の前に馬車の如く道の如く進んで、彼女を導きました。この言葉は彼女の足の燈火でありました。朝出發する前には彼女はこの言葉を言つては百姓に道を尋ねました。畑を耕してゐる百姓たちは、手眞似でロンドンへ行く道を敎へて呉れました。この燈火は、丘や野、林や川の上にかかげられて、遂に彼女はロンドンの町の門まで來ることができました。

ロンドンの町を歩いて「ロンドンのア・ベケット」と彼女は申しました。町から町へとこの東洋人の娘はあるき、家々をこの言葉を言つては尋ねました。大勢の人々が珍らしげに彼女のまはりを取りまき、ある人は怪しみ、ある人は嘲けり、ある人は同情しました。けれども彼女は物ともせず人々に向つて「ロンドンのア・ベケット」と言つて尋ねました。

この噂は町から町へ傳はり、人々の唇に行きとどき、遂にある親切な人がア・ベケットの家を探して、その家の前まで彼女を連れて參りました。そこで彼女の長い間の苦勞は終りをつげました。ア・ベケットはよく聞き覺えのある彼女の聲をきき、走り出で、彼女の胸を抱いて、家に連れて入り、彼女を妻として、彼の愛の限りをつくして、彼女を愛しました。

彼の言葉は彼女の足の燈火であり、彼女を彼のそばに導きました。彼女は有名な英國のカンターベーリイのアーチ・ビショップたるトマス・ア・ベケット

の母となりました。

（三）

これは言葉が人の足の燈火となつたお話であります。それで私が今申したいのは、この東洋の少女のやうに私共の足の燈火となる言葉を私共も持つて居ると云ふことであります。

ギルバート・ア・ベケットよりも、もつと偉大なかたがエルサルムに行き、そこで囚れ人となりました。彼はこの世を去る前に彼を愛する人々の足の燈火となる言葉を殘し、彼等の道の光となり、彼等が彼のあとに從ひ、彼の家庭に行き、彼と共に永く住むことができるやうにしました。「汝のみ言葉はわが足の燈火」と聖書にあるのは、このことであります。英國の青年から一少女が學んだこの地上の言葉さへも、遠い地中海のはてから、か弱い一少女を遠いロン

ドンまで導く道の光となりましたから、まして私共がイエスさまから受けた天の神さまの言葉は、イエスさまの許に私共を導くもつと善い光であります。

聖書の中にある基督のお言葉はこの燈火であります。これは私共の足の燈火であつて、さけるべき道、踏むべき道を指し示します。これは何處へ行く時にも、どんな仕事に從事する時でも、どんな友達と共にゐる時でも、どんな所にあつても、私たちの足の燈火であります。

學校へ行く道、教會へ行く道、町へ行く道の燈火であります。一人であつても、友人と一緒である時でも、これは眞の唯一の足の燈火であります。これは神が私共に與へた、私たちがこの地上であるかなければならぬ凡ての道を照らす燈火であります。これは地上から天國へ行く公道を照らす神の燈火であります。

これは私共のためだけにのみ造られた新しい燈火でありません。これは古い

よく知られた、よく用ひられた燈火で、いろ〳〵な形で大昔から人々が用ひたものであります。

これは神の靈がはじめて人の靈に語り、人が「主よ、汝は我に何をなさせ給ふや」と答へた大昔からありました。アブラハムをカルデヤのウルから約束の地へ行く道を照らした物は何んでありましたか。それは神がアブラハムにウルで語り給ふた言葉でありました。

モーセをミデアンのエテロの羊の群からエジプトへ、エジプトから紅海へ、紅海からビスガの山へ導いたのは何んでありますか。それは燃ゆる棘の中で彼に教へ給ふた神の言葉でありました。羊の群から王位までダビテを導いたものは何んでありますか。ダビテは詩篇の中に申してゐます。「なんぢのみことばはわがあしの燈火」と。

(Alxander macleod, Talking to the Children の八版の三十九頁の大意)

隣人

「己のごとく汝の隣を愛すべし」マタイ傳一九の一九

（一）

ある都會から遠く離れた大きな山にかこまれた田舍村がありました。この村は昔は盛んでありましたが今は石垣はくづれ、家は倒れたり、腐つたりしてもう見るかげも無い難破船のやうになつて居りました。草は生ひ繁り、道か野原かわからぬやうになつてゐました。その村の住民たちは學問をしたこともなければ、本も讀めず、暗い悲しい淋みしい貧乏村でありました。

ある年の春淺い頃、朝早くこの村に一人の旅人がやつて來ました。旅人は村の一方の端から他の端へと熱心に方々を見てあるきました。特に通りがかりの人の顔をよくみつめました。

そのうちに仕事に出る人が家々から來て來ました。旅人はぢつと立つてゐて氣味惡るくも一人一人を見ました。そのうちに若い娘さんたちが井戸へ水汲みに集まつて來ました。すると旅人はまたそこに出かけて、一人づつ話しかけました。それからある破れ家の外に出て日向ぼつこをしてゐる盲目の老人のそばに行つて昔のことなどを聞きました。けれど若い娘さんも、年とつた盲目さんもこの旅人が願つたやうなことを話してはくれませんでした。それで旅人はいたく失望してしまひました。

それから旅人は人のゐない裏通りを歩き、ある破れて家根は落ち、窓も爐も扉も無い家の前に行つて、石垣に腰を下して休みました。

この家こそ、この旅人がはじめてこの世の中に生れ、少年時代を過したなつかしい家でありました。ぢつとこの廢屋を見つめてゐると、いつしか少年時代の有様が彼の眼の前にまざ〳〵と浮んで參りました。花園の花床で働いてゐる

父親の姿、臺所で料理をこしらへたり、お座敷で裁縫してゐる母親の姿などが浮んで來ました。

兄弟や妹たちの笑ひ聲が音樂のやうに耳の底に響いて來ました。そしてその笑ひ聲が止つた日のことを思ひ出しました。その日美しかつた彼の妹は白い布をかぶせた棺に入れられて墓場に運んで行かれました。大きな涙が旅人の兩の頰に光りました。

（二）

それから不思議なことが起りました。この小屋の向ふの方にゆるやかな丘がありました。その丘の上にはるかに斑點のやうになつて羊飼たちの小屋の散在してゐるのが見ねました。綠の草の上で羊が草をはんで居りました。

旅人が破れて屋根の落ちた小屋の破れ石垣を見てゐますと、遠くの方からだ

ん〳〵と歌聲が近づいて來るのを耳にしました。それから歌つてゐる人の姿が見ねて來ました。羊飼たちの小屋から來たと思はれる小さな少女が歌の主であります。少女の足ははだしでありますが、羽でもあるかのやうに速く下つて來ました。金色の髪は後の方に風に吹かれて居りました。彼女は彼が腰かけてゐる所に眞直ぐにやつて來ましたので、その歌聲がよく聞こねました。

親しい友が見つかつて？
愛の心がありまして？
あなたは愛の心もて
友をお見つけなさるなら
愛の心のまはりには
愛の心が參ります。

それから少女は歌をやめて、ぢつと旅人を見つめて尋ねました。

「あなたは何か苦しんでいらつしやいますね、お兄さん」

少女はまだ小さく、そして一度も會つた覺えはありませんでしたが、旅人は彼女に心を打ち明けて話しました。

「私はこの國の遠い所からこの村に弟や妹を探しに來たのですが見つからないのです。私がこの村を出て行きました時には貧乏でありましたが、今はたんとお金を持つてゐます。もし弟や妹が見つかつたらこの金を分けて與へるつもりです」

旅人が話してゐるうちに、少女はだん〳〵と美しくなつて來るやうに思はれました。彼女の眼は紺碧の空のやうに輝き、彼の魂の奥底まで照らしました。朝の光が少女の髪の毛を照らした時、それは頭の上に置かれた黄金の冠のやうに見ゐました。この美しい姿が眼の前にあらはれました時、旅人はこの姿をずつと昔見たことがあるやうな氣がいたしました。この姿こそ以前に死んだ妹

の顔にちがひないと云ふ考へがひらめきました。それから少女は

「さあおいで下さいませ、兄さん、あなたの弟さんや妹さんをおめにかけませう」と言ひました。

（三）

少女は旅人の手を引つぱつて、往來に出て、盲目の老人が日向ぼつこをしてゐる所に連れて來て。

「ごらんなさい、これがあなたの探していらつしやるお父さんです」と言ひました。

「でも私の父はとうの昔死んでしまつたのです」と彼は答へました。

それには何も答へないで、美しい少女はかれをつれてすすんで行つて、

「あなたはこの美しい娘さんたちが井戸から歸つて來るのを御覽になりません

か、これがあなたの妹さんです」と申しました。

「私の妹はもつと年とつて、白髪頭をしてゐる筈ですが」と彼は答へました。

それにも又も答へず、少女は

「この畑に働いてゐる人たちを御覽なさいませ。これがあなたの兄弟たちであります」と申しました。

「いや、私にはたつた一人しか弟はゐなかつたのです」と旅人はまた答へました。かれがかう答へてゐる間に、子供たちが學校の方に行きはじめるのが見ゐました。

「あの大勢の子供さんたちが、みんなあなたの子供です」と少女は答へました。

旅人はまよつてしまひました。彼のまはりの物がみんな朝の光の中に吸ひ込まれたやうな氣がしました。子供たち、娘たち、働いてゐる人たちや盲人がみんな光線の中から出て來たやうに思はれました。その光の中に美しい少女も、

彼の方をみて微笑みながらやさしい顏をしたまま吸ひ込まれてしまひました。

それから他の光景も虹がゐたやうに消え失せてしまひました。

彼が我に歸りました時、彼はまだもとのこはれた石垣の上に腰かけて居りました。向ふ側には屋根の落ちた小屋は前と同じやうに立つてゐましたが、少女の姿は何處へ行つたか見ゐませんでした。その近所には學校へ行く子供たちも働いてゐる大人たちも見ゐませんでした。

今まであつたことが、はつきりわからなくなつてしまひました。眠つてゐる間に何かを想像して幸福な夢を見たのでありました。けれど何んだか彼がまだ幻で見た、向ふの丘から美しい少女が下つて來て、歌を歌ひ、彼に敎へたのが事實のやうな氣もいたしました。けれど他にたれもこの少女を見たものもなければ、羊飼の部落にその少女を知つてゐるものもありませんでした。

（四）

彼が見たことが事實であるか、幻であるかいづれにせよ、これから彼の生活に一大變化が起りました。

美しい髪をした少女が、その歌が彼の心の奥深くきざみこまれ、それによつて神は彼の心を變へ、温和な隣人に親切な人にされました。隣人の愛の精神が彼の心に來て、この荒れはてた村に新しい世界と新しい義務を發見しました。

彼はこの日にヨハネがパトモス島で見たやうな『新天新地』を見たとその後の語り草にしました。彼は廢れた小屋のまへに脆まづいて心を神に献げて「神よ、あなたの御子イエスさまにあつた心を私にも持たせて下さい、私が持つてゐる凡ての物は神の有、それは神より來り神に歸るものであります、あなたのみ心をなしとげるために私を助けたまへ」と祈りました。

彼は生れかはつた人になつて立ち上りました。

「私はこの村に留まることにしやう。この村の石垣を造り、村人たちに私の富

を分け與へやう」と彼は一人で囁きました。

そこで彼はこの村に留り、若い人や老人やすべての人の隣人となりました。村人たちは彼の子供、兄弟、姉妹、兩親となりました。光は彼等の家に照りそめ、繁昌はその村に來ました。人々の唇からは歌が洩れはじめました。富める人は幸福に、貧しき人は祝福されました。

やがて彼が老人となりました時、若い人々は彼の所に尋ねて來て祝福をして貰ひました。そしてその時きつと彼は幻に見た子供の歌の話をして、その歌を幸福な人生の秘訣とよんで居りました。

この事件が起つてから長い年月は過ぎました。この荒れはてた町は今では大きな繁榮した町になつて居ります。今この町に大きな十字架が建てられ、その上に少女の像が刻まれその下に

親しい友が見つかつて？

愛の心がありまして？
あなたが愛の心もて
友をお見つけになさるなら
愛の心のまはりには
愛の心がまゐります

と云ふ歌が刻こんであります。

これがこの貧しい村の人々に財産を分け與へた旅人の記念碑であります。彼の名前はわかりません。けれどこの町の歴史に『この町を繁榮せさた人は隣人の愛を持つた人である』と云ふ意味が書いてあるのを讀むことができます。

(A. macled, the Gentle Heart, P37)

獄中の讃美歌

ある朝、桑港の法庭に髪を亂した、血走つた眼をした被告が三十人ばかりよび出されて、裁判長に取調べられることになりました。

これは毎朝開かれます法庭で、前晩中に酔ぱらつたり、騒いだり、喧嘩口論をしたりして拘留を食つた者が審問されるのでありました。

ある老人は剛直な格構をしてゐました。ある者は恥しげに頭を垂れて居りました。

この人たちが入場するために騒がしかつた法庭も漸く鎮つて、これから裁判長が取調にかからうとしました時、突然下の室から歌の聲が聞ゐて來ました。

昨夜まどろみしとき
うるはしき夢を見ぬ

昨夜！それは夢幻の如く一同を恍惚とさせました。その歌詞に一同は思はず引きつけられて耳を傾けました。

われはエルサレムの
宮のほとりに立ちぬ

歌はつづいて行きました。裁判官はぢつとして、無言の審問をはじめました。この歌はこの町の歌劇團の人たちが何かの事件で呼び出され、今しも訊問を待つま、その中の一人が口ずさんだのでありました。

歌はつづいて行きました。腰掛けてゐた被告たちは、その感情を動かされました。一人二人はひざまづきました。一人の少年は壁にもたれ、兩腕の中に顏を埋め「お母さん、お母さん」とよんですすりなきました。

このすすり泣きの聲は歌をきいてゐる人々の心を更に動かしました。歌はなほもつづきました。遂に一人が立上つて

「裁判長殿、私たちはかうしてゐてよいのですか。私たちは罰を受けに來たのです。……けれど……」と言つて、その人も亦とう〳〵すすり泣きはじめました。

裁判は續けやうにも、つづけられませんでした。けれども、裁判長は歌をやめさせませんでした。被告を鎮めるために來た警官たちも、手を空しうして後に退きました。

歌はとう〳〵クライマックスまで行きました。

エルサレム、エルサレム
歌へ、歌へ、夜は明けぬ
いと高きところにて、ホザナ
とこしなへに、ホザナ

メロデイのエクスタクシイのうちに最後の言葉が終り、滿場は水を打つたや

うに、靜になりました。裁判長は被告の顏を見ました。歌に感動されない被告は一人としてありませんでした。

裁判長は親切な、やさしい忠告をして一同を調べないで放免しました。その朝はそれで一人として獄役に着かされた者はありませんでした。

歌はこの人たちを悔改めさせるに、刑罰よりも、もつと多く役に立ちました。

誰にもできる傳道

汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父をあがめんためなり。（マタイ傳第五章十六節）

私たちが一番したいと思ふことは何んでありませうか。それを一言で言へば私たちの友人にイエスさまを知らせ、愛させ、そしてイエスさまに從はせることであります。

それにはどうしたらよいでせうか、まづ自分みづからそれを實行して見せることであります。私たちが心から身も靈もイエスさまに献げてゐるといふ事、私たちは規則や習慣で教會の禮拜に出席するのでなくて、喜んで出席し、缺席することを心から悔い、イエスさまに近づかうと努め、イエスさまの心が私た

ちの心を左右してゐると云ふ事實が、友人をしてイエスさまを信ぜさせるに一番有効であります。

かうすれば私たちが一言も言はなくても傳道ができます。日曜だけの基督教で、日曜と日曜の間にない基督教は役に立ちません。教會では忠實であつても自分の家に歸つて利己的でありますなら、その信仰はやくにたちません。

イエスさまが實際に私共の力であり喜びであるといふことを、私共の生活であらはしますなら、イエスさまが私共に他人のことを親切に思はせ、自分が苦しみに出會つても樂しく居られ、どんな困難にも忍び、他人のために犧牲の心を起させ、他人に奉仕するの心をイエスさまが私共に起させるのだといふことを人が知りますなら、その人は自然とイエスさまを信ずるやうになります。

友人を、イエスさまのことが聞かれる場所に連れて行くことは、私たちのイエスさまについての信仰を強くします。私たちはイエスさまのことを人に話し

て聞かせやうと思つてもなかなかうまく話せません。けれど教會では聖書が讀まれ、説教がされます。日曜學校では聖書が學ばれます。そこへ參りますならイエスさまのことがよく聞かれます。

たゞ教會に音樂をきくために友人をつれて行く位なら、音樂會に引張つて行つた方がよいでせう。友だちの意志に逆つて無理に強ひてはなりませんが、根氣よく教會に案内したらよいと思ひます。

はじめからすぐに友人が信者になるやうになどあまり多くを期待してはなりません。最初の程は友人は教會に失望して、もう行かぬと言ふかも知れません。けれどなほも根氣よく誘つてゐますなら、そのうちにだんだんと教會に興味を覺え、説教や音樂を聞き、心に喜びを生じ、遂に信者になりますでせう。

これが私共が友人を宗教に導く一番よい方法であります。私たちの家庭の中に誰れか教會に出席せぬ人がありますなら、日曜にはその人を誘つて行かなけ

ればなりません。この忍耐深い努力はきつと實を結ぶにちがひありません。（ホッチ）

善と惡

（節制日のため）

（一）

デンマークのクロンボルクの要塞の城に四つの繪が掲げてあります。これは一度見ますと、一生涯忘れることのできない感動を與へます。

第一の繪は小舟が今まさに海に向つて乘出さんとする光景が畫かれてあります。舟の中央にブロンド色の髪をした美しい少年が、熱心に海をながめてすわつてゐます。少年の側に一人の天使が立つて、少年を守つてゐます。

舟の端に二人の小さな人物がゐます。一人は陽氣な悅ばしそうな顏をして舟の舵を執つてゐます。他の一人は暗い陰氣な顏をした人物で、それは今眠つて居ります。舵を執つてゐる人物は善の精で、眠つてゐるのは惡の精であります。